

古代漢字音の音韻対立研究方法論*

— 高句麗語, 百濟語, 中国前期中古漢語を中心に

李丞宰이승재Yi Seungjaeイ・スンジェ (ソウル大学)

【訳者注】原則としてハングルに訳者が付けたローマ字転写は転字によるものである。ただし朝鮮語固有名詞はハングル表記を文教部旧方式によって転字したものである。それ以外のローマ字はすべて筆者のものである。

1. 序言

この論文は古代詩歌の漢字音を研究する時に¹⁾ 音韻論的単位である音素をどう設定するかを詳しく解き明かして説明することに目的を置く。

題目で古代というのは正確に限定すれば、中国魏晉南北朝から北宋までの時期を指す。

われわれは中国の漢代までの漢語を上古語といい、魏晉南北朝から北宋までの漢語を中古漢語と呼ぶ。²⁾ 漢語中古音を研究する時には 601年に編纂された『切韻』と1007年に編纂された『廣韻』等の『切韻』系韻書が代表的な指標となる。この韻書を研究することによって漢語中古音にどのような子音と母音があったか知ることができる。中国の周辺国で受容した漢字音を研究する時にこれが常に基準となるのだが、われわれもこれを基盤として高句麗語、百濟語、中国の前期中古漢語等の漢字音を分析することとする。朴炳采Bag Byeongchaeパク・ピョンチェ(1971)と姜信沆Gang Sinhangカン・シンハン (2011a, 2011b)も朝鮮古代漢字音が南北朝の時期に入ってきたものとしている。

百濟と高句麗は7世紀中葉に滅亡した。これらが残した言語資料はたいへん少なく非常に断片的である。人名、地名、官職名等の固有名詞が漢字で記録されて伝わるのみである。このうち朝鮮語の訓を表記した表訓字を除いて表音字で³⁾ 使用したものだけ網羅すれば百濟語表音字694(707)字と⁴⁾ 高句麗語表音字690(727)字を確保し得る。滅亡以前に記録された表音字に限定すれば各々340字程度に過ぎない。非常に足りないようだが、これらを効果的に分析すれば、百濟語と高句麗語の音韻体系を再考し得る。

漢語音韻論研究の資料も実情は多くはない。漢字は基本的に表意文字であるから、その意味を中心に使用することとなり、相対的にその音価を念頭に置いた表記は多くない。音価を意識した表記として詩歌の押韻や元代の曲詞等があるが、これだけでは足りない。そうして金瓶梅、紅樓夢等の小説で対話文に使用さ

れた漢字を補充して研究する。対話文に使用された漢字は記録当時の口語で実際に使用したという意味を持つので、音韻体系研究の対象となる。

この論文では『世説新語』に反映された言語を5世紀前半の前期中古漢語と呼び、その対話文に現れる用字を対象とし、子音体系を再構することにする。⁵⁾『世説新語』は『世説新書』ともいうが、中国南北朝の宋人である劉義慶(403~444)が魏晉の時期の話を集めた逸話集である。従って5世紀前半の前期中古漢語を反映したものと見做す。ここに現れる対話文は漢語の歴史言語学の資料となるので、これを資料として漢語の通時統辞論を展開した論文が非常に多い。しかしこの対話文に出て来る用字を音韻論的に分析した研究はまだ見ていない。この用字をみな集めれば2,212(2,486)字に達するので、資料の量は充分である。

この2,212(2,486)字を既存の研究者たちが音韻論研究の対象としない理由は何だろうか？ その答えは恐らく方法論の不在にあるだろう。われわれはプラハ学派の音韻対立の理論を適用してこれを克服することとする。この理論では相補分布を見せる2つの音声は1つの退位に合わせ、意味分化を呼び起こす最小対立があれば、対立項の音声を各々独自の音素に登録する。未知の言語を対象として音素目録を決める時にこの方法を普遍的に用いる。

この音韻対立の理論を活用して이승재 Yi Seungjae イ・スンジェ(2013)では百濟語の子音体系を再構し、ひいては高句麗語の子音体系や母音体系も再考し得る。この研究方法が百濟語や高句麗語にのみ適用されるならば別に新しいところはない。しかし漢語中古漢語の音韻体系を研究する時にもこの方法が有効ならば、事情が異なる。われわれの研究方法が韓国は勿論、中国や日本の古代漢字音研究にもすべて適用される普遍的方法であることが論証されるからである。

2. 漢字音の音韻対立

古代漢字音を研究する時に音声と音素を区別しない時が少なくない。そうして奉母が音声 [v] なのか、音素 /v/ なのか区別せず、ただ v (または *v) と表記する。これは逆説的には古代漢字音研究では音韻対立理論を適用していなかったか、適用し得ないことを意味する。例えば、『切韻』系韻書を分析して漢語中古音に36字母があるという時に、この36個の子音が音声次元の子音なのか音素次元の子音なのか明らかにしていない。音素の資格を持つ子音が36個にもなる言語は非常に稀である。この中で一部の子音は変異音にすぎないから、これらは音韻体系から取り去って減らす必要がある。⁶⁾ この時にわれわれはプラハ学派の音韻対立理論を適用するのである。

ところで漢字音研究に音韻対立理論をどう適用するのかと反問する人が少な

くない。漢字音を分析する時にKarlsgren以来音素的記述よりは音声的記述を重視してきたために⁷⁾ 慣習的に懐疑的反応を見せるのである。しかしわれわれは漢字音もプラハ学派の相補分布と最小対立を中心として記述し得ると見る。理解の便宜のために現代朝鮮漢字音を例に挙げる。

(1) 現代朝鮮漢字音の音節分布表

声母 韻母	唇音			牙音			齒音	
	ㅂb	ㅃbb	ㅍp	ㄱg	ㄲgg	ㅋk	ㅅs	ㅆss
ㅣi	比비	ㅃ비	皮피	基기	끼	키	時시	氏씨
-lig	빅	ㅃ빅	픽	긱	喫긱	긱	式식	씩
ㅇij	氷빙bi	ㅃ빙	빙	깅	깅	깅	성	쌍
ㅏa	바	ㅃ바	波파	加가	까	카	事사	싸
ㅓar	發발	ㅃ발	八팔	葛갈	갈	칼	殺살	쌀
ㅇaj	方방	ㅃ방	방	江강	강	강	上상	雙쌍
ㅓo	普보	ㅃ보	布포	古고	꼬	코	小소	쏘
ㅓoai	배	ㅃ배	배	卦괘	괘	快쾌	刷쇄	췌
ㅇaj	밤	ㅃ밤	팜	甘감	감	감	三삼	쌈
ㅇom	븀	ㅃ븀	븀	븀	븀	븀	븀	븀
ㅃub	븀	ㅃ븀	븀	븀	븀	븀	븀	븀
∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴	∴

現代朝鮮語には数千個の音節があるが、漢字音に範囲を狭めれば、その音節数が500個余りに減る。漢字はすべて1音節語だから、その分布を分析する時には(1)におけるように行には韻(即ち英語のrhyme)を配列し、列には声母(即ち子

音)を配列し得る。現代朝鮮語の子音は19個だから、これを19列に分けて入れることになり、韻に対応するものは数百個だから(1)の‘ㄱom, ㅁub’行の下に無数に続く。漢字音研究では韻に該当する‘|i, -ig, diŋ, ...ㄱom, ㅁub, ...’等が声母(即ち初声)の音韻論的環境となる。(1)ではわずらわしさを避けて声母の列に唇音の‘ㅁb, ㅁbb, ㅍp’, 牙音の‘ㄱg, ㄱgg, ㅋk’, 齒音の⁸⁾‘ㅅs, ㅆss’の子音だけを配列し、韻母の行に11個の例だけを配列した。該当する漢字をこの行列の升に入れるのだが、該当する音節として読まれる漢字がない時には空白に‘빅big’のように空白として残しておいた。

(1)の音節分布表をよく観察すると、体系的な空白と偶然の空白の2種類があることが分かる。第1に、現代朝鮮漢字音で声母(即ち初声)が‘ㅁbb’の漢字音の音節がまったくない。これは‘ㅁbb’が朝鮮漢字音では子音音素がではないということの意味する。例がないからである。‘ㄷdd, ㅈjj’等も同じである。第2に、韻が‘ㄱom, ㅁub’である漢字音の音節がまったくない。これは“円唇母音の後に両唇音来られない”という漢語の音節構造制約に起源を置いている。この制約が朝鮮漢字音にもそのまま輸入された。音節分布表(1)に限るならば、上の2つを除く残りの空白はすべて偶然な空白である。例えば、‘ㅁb’列で‘빅big, 바ba, ㅁboai’音節に対応する漢字がないのは偶然の空白である。

(1)の例を基準として、今唇音‘ㅁb, ㅁbb, ㅍp’相互の間の音韻対立を記述しよう。朝鮮漢字音では声母‘ㅁb’と‘ㅁbb’の音韻対立の対がないので、‘ㅁb’と‘ㅁbb’を1つに括って音素 /p/と見做す。他方、‘ㅁb’と‘ㅍp’の音韻対立の対には「比:皮」,「發:八」,「普:布」の3つの対がある。これらはみな声母でのみ音価が異なり、残りの音韻論的要素(即ち韻)では音価が同じである。従ってこれらは声母の最小対立となる。プラハ学派の音韻対立理論では最小対立が成立すれば、対立の対(最小対)を各々独自の音素として登録する。これによって「比・發・普」の声母‘ㅁb’と「皮・八・布」の声母‘ㅍp’を各々独自の音素 /p/と /ph/として登録する。要約すれば、朝鮮漢字音の唇音では /p/と /ph/の2種類の子音が音素の資格を持つ。

同じ方法で、牙音(即ち軟口蓋音)‘ㄱg, ㄱgg, ㅋk’の分布を記述してみよう。声母‘ㄱg’と声母‘ㄱgg’の分布を対比してみると、声母‘ㄱgg’を持つ漢字としては「喫ㄱggig」が唯一のものである。ところでこの「喫ㄱggig」は対立的価値を持ち得ない。声母‘ㄱg’を持ちつつ‘ㄱgig’と読める対立項が朝鮮漢字音にはたまたまないからである。この空白を活用すれば、声母‘ㄱg’と声母‘ㄱgg’の分布が相補的だと言える。従って現代朝鮮漢字音の牙音では‘ㄱg’と‘ㄱgg’を1つに括って音素 /k/だけを登録する。⁹⁾次に、声母‘ㄱg’と声母‘ㅋk’を対比してみる。この時には相補分布ではない。韻母‘ㅁoai’の前に声母‘ㄱg’が来た「卦

괘goai」だけでなく、声母 ‘ㄱk’が来た「快괘koai」もあるからである。この‘卦괘koai’と「快괘koai」は同じ音韻論的環境である‘괘oai’の前に各々‘ㄱg’と‘ㄱk’が来たものであるから、この対は実質的に声母の最小対である。この対を論拠として現代朝鮮語漢字音で /k/와/kh/を各々独自の音素として設定する。

最後に、(1)の歯音で声母 ‘ㄷs’と声母 ‘ㅌss’の対立関係を考察してみよう。同じ音韻論的環境である‘ㅣi’の前に、声母 ‘ㄷs’が来た漢字として「時시si」があるだけでなく、声母 ‘ㅌss’が来た漢字として‘氏씨ssi’がある。また、「上상sanj」と「雙쌍ssanj」は同じ韻母である‘ㅗaŋ’の前に各々声母 ‘ㄷs’と声母 ‘ㅌss’が来ている。従ってこの2つの対は声母の最小対である。最小対が成立するので、‘ㄷs’と‘ㅌss’を各々独自の音素 /s/及び /s’/と見てこれらを音素目録に入れる。

上の3つの例を通じて、漢字音研究にもプラハ学派の音韻対立理論を適用し得ることが分かる。ところで漢字音では相補分布と最小対の関係が極めて独特である。第1に、相補分布を成すということは最小対がないことを意味する。第2に、最小対を成すということは対比される2項が相補分布ではないことを意味する。上の(1)でこれを確認し得る。この排他的特徴のおかげで、プラハ学派の音韻対立理論が最もよく適用される対象がまさに漢字音であると言えるのである。

先に例示した相補分布と最小対を適用して、今『世説新語』の対話文に使用された2,212(2,486)字を分析してみることにする。この分析には漢語中古音の音韻体系を適用する。『世説新語』は5世紀前半に叙述されたので、漢語中古音の分類体系を利用して分析しなければならない。もしも元代の曲詞が研究対象ならば、14世紀に編纂された『中原音韻』の音韻体系で分析しなければならない。

ここでは便宜上『世説新語』の唇音のうち明母字、微母字、舌音の泥母字、歯音の日母字だけを分析の対象とする。総2,212(2,486)字のうち明母の字は91字、微母字は27字、泥母字は29字、日母字は37字である。これらを分布分析表の中に入れれば下の(2)の如くである。この分析表では行に韻を配列し、列に声母を配列する。

(2) 『世説新語』2,212(2,486)字の明母・微母、泥母・日母の分布分析表

韻		声母	唇音		舌音	
			明母m 91字	微母mj 27字	泥母n 29字	日母j 37字
果攝	歌韻			那奈		
	戈韻			懦		
假攝	麻韻	馬罵			若	

遇攝	模韻	莫慕暮姥謨莽		奴鴛怒弩	
	魚韻				如汝
	虞韻		無亡武務霧誣 燕舞		乳襦濡儒
效攝	豪韻	毛髦冒旄			
	肴韻	貌			
	宵韻	妙廟苗			饒擾
	幽韻	謬			
	蕭韻			黠	
流攝	侯韻	母茂畝某			
	尤韻	謀矛侔			柔
止攝	支韻	彌糜靡			爾兒邇
	脂韻	美眉			二
	微韻		味未微叻		
	之韻				而耳
蟹攝	泰韻			奈	
	哈韻			乃迺	
	灰韻	每梅昧		內	
	皆韻	埋			
	佳韻	買賣			
	夬韻	邁			
	齊韻	米迷		泥禰	
咸攝	覃韻			南男納	
	鹽韻				髡
	添韻			念捻	
深攝	侵韻				入任
山攝	寒韻			難	
	桓韻	末滿漫		煥	
	刪韻	蠻慢			
	元韻		萬晚		
	仙韻	面免滅縣冕綿			然熱燃
	先韻	眠		年	
臻攝	魂韻	門沒疊殄		訥	
	諄韻				潤

	文韻		勿聞文物問		
	眞韻	民愍密閔敏			人日仁忍刃刃
宕攝	唐韻	莫鳴茫幕莽寞		囊	
	陽韻		亡望忘網芒妄罔		若讓弱壤
梗攝	庚韻	明命孟盲猛陌			
	耕韻	麥脈			
	清韻	名			
	青韻	冥茗覓溟		寧佞	
曾攝	登韻	默冒		能	
通攝	東韻	日木夢蒙穆牧			戎肉
	鍾韻				辱
江攝	江韻	邈			

上の分布分析表を検討すると、明母字が来る行には微母字が来ない。逆に、微母字が来る行には明母字が来ない。これは5世紀前半の前期中古漢語で明母と微母が相補分布であることを証明してくれる。従ってこの前期中古漢語では明母[m]と微母[m]を1つに括って明母・微母/m/とし得る。これは5世紀前半の漢語中古音ではまだ重唇音と軽唇音が分化していないということを意味する。

次に、舌音の泥母と歯音の日母を対比してみる。ここでも、泥母と併せて使用される韻母は絶対に日母と合わせて使用されない。逆に、日母と併せて使用される韻母は絶対に泥母と交わらない。これは泥母と日母の分布が相補的(排他的)であることを意味する。従ってこの前期中古漢語では泥母と日母を1つの単位として束ね得、これを音素泥母・日母/n/とし得る。

日母は韻図中心の中国音韻学では舌音ではなく歯音として分類することが一般的であるが、前期中古音ではそうではない。前期中古音では日母が泥母と相補分布を成すから、泥母とともに舌音に入れなければ正しくない。(2)の日母の列に入れた37字であまねく確認し得るように、日母は韻腹 /i/の前か介音(わたり音) /j/を持つ韻母の前に分布する。この音韻論的環境では口蓋化が起こるのが普遍的だから¹⁰⁾ 日母の音価は [ɲ]となる。他方泥母は口蓋化が起らない環境に現れるから、その音価が [n]である。音声 [ɲ]と音声 [n]が相補分布を成すので、前期中古音で音素の資格を持つものは泥母・日母/n/の一つだったと言えるのである。

中国音韻学では口蓋化した鼻子音にさらに脱鼻音化(denasalization)が起り、その結果として唐代以後の後期中古音の段階で日母が独自の音素 /z¹¹⁾に分化したと記述する。このように分化が起った後には日母を始めて分類し得るが、分化が起きていない前期中古音の段階では舌音として分類するのが正しい。

上の口蓋化と脱鼻音化は唇音に属する明母と微母でも確認される。口蓋化の環境の前には微母[m]が来、残りの環境の前には明母[m]が来る。この2つが相補分布であるから、この2つを1つにまとめて明母・微母/m/とし得る。¹²⁾

上のように相補分布と最小対を活用すれば、古代漢字音でどれが変異音で、どれが音素だったかを確定し得る。『世説新語』の対話文の用字を分析すれば微母[m]と日母[n]は各々明母・微母/m/と泥母・日母/n/の変異音だった。このような方法で百濟語、高句麗語、前期中古漢語の子音目録を確定し得、ひいてはこの音素相互の対立関係を論じて音韻体系を再構し得るのである。

本格的な論議に入る前に、漢字音を構成する音韻論的要素を簡単に説明しておくことにする。われわれは漢語中古音の音価として이토 지유키 Ito Jiyuki 伊藤智ゆき (이진호 Yi Jinho イ・ジンホ 訳) (2011) を採るから、音韻論的要素を記述する時もこれに拠る。¹³⁾ 大部分の漢字は一つの単語であり、漢字音は常に一つの音節から成る。漢字音の音節を構成する基本要素には声母、韻、声調の3つがある。声母は朝鮮語の初声にあたるもので、たいていは子音である。韻は英語の rhyme にあたるが、開合・等呼・韻腹 (または主母音、核母音)・韻尾を併せた要素である。韻尾も韻に包括されるが、이토 지유키 伊藤智ゆき (이진호 이・ジンホ 訳) (2011) では韻尾を別に分離していない。韻に韻尾が含まれる 唐韻、寒韻、侵韻等だけでなく、韻尾のない歌韻、模韻、支韻等があるからであり、入声韻尾 /-p, -t, -k/ や陽声韻尾 /-m, -n, -ŋ/ 等が声調と関連しているので、韻尾を独立の要素として分離しなかったようである。声調は現代音韻論の tone にあたり、漢語中古音には 平声(^l)、上声(^R)、去声(^D)、入声(^E)の¹⁴⁾ 4つの声調がある。

韻は開合・等呼・韻腹を併せたものだが、このうち開合は開口と合口から各々「開」と「合」を取ったものである。開口はわたり音 /w/ がいないことを意味し、合口はわたり音 /w/ (または /q/) があることを意味する。等呼が何かについてはまだ意見が統一していないが、現代音韻論の開口度を意味すると見る見解が多い。1~4等の4つに区分するが、数値が大きくなるほど開口度が狭くなる。何よりも3等が常に介音を持つという事実が重要である。¹⁵⁾ 韻腹は主母音または核母音とも呼ぶように現代音韻論の母音にあたる。

上に言及したことを要約すれば漢字音の音節は [聲母, 開合, 等呼, 聲調, 韻] の5つの音韻論的要素から成る。韻尾は声調と韻に連動して決定される。(1)で例として挙げた声母の最小対は声母だけ互いに異なり、残りの4つの要素は同じ対である。古代漢字音にどのような子音があるかを論ずる時は声母の最小対の有無を中心に論ずる。母音にどのようなものがあつたかを論ずる時は韻腹の最小対を求めればよい。韻の最小対には開合の最小対、等呼の最小対、韻腹の最小対等があるが、この中でも韻腹の最小対が核心的な論拠となる。勿論これらの最小対を論ずる時には韻尾が互いに同じでなければならない。

この論文では個別の漢字の音価を上の5つの音韻論的要素で表示する。論議の便宜のために、その表示方法を提示すれば次の如くである。

(3) 漢字音音価表示方法の例示

1. 諸[章中3平魚] = 諸[章母, 中立, 3等, 平聲, 魚韻]
 沮[清中3平魚] = 沮[清母, 中立, 3等, 平聲, 魚韻]
2. 家[見開2平麻] = 家[見母, 開口, 2等, 平聲, 麻韻]
 佳[見開2平佳] = 佳[見母, 開口, 2等, 平聲, 佳韻]
3. 戴[端開1去哈] = 戴[端母開口1等去聲哈韻]
 帝[端開4去齊] = 帝[端母開口4等去聲齊韻]
4. 諸[章中3平魚] = 章₃諸_魚^L, 3諸_魚^L
 沮[清中3平魚] = 清₃沮_魚^L, 3沮_魚^L
5. 衡[匣開2平庚] = 匣₂衡_庚^L, 開₂衡_庚^L
 形[匣開4平青] = 匣₄形_青^L, 開₄形_青^L
6. 設[書開3入仙] = 書₃設_仙^E, 開₃設_仙^E
 失[書開3入眞] = 書₃失_眞^E, 開₃失_眞^E

(3.1)の諸[章中3平魚]は「諸」の音価を5つの音韻論的要素で分析して表示したものである。この音価は『切韻』系韻書を代表する廣韻の音価であるから、漢語中古音の音価である。5つの中で第1の位置に置いた「章」は声母が章母であることを、第2の「中」は開合で中立であることを、第3の「3」は等呼が3等であることを、第4の「平」は声調が平声であることを、第5の「魚」は韻が魚韻であることを指す。(3.1)の「諸」と「沮」は声母でのみ違いがあり、残りは同じだから、声母の最小対である。

(3.2)の家[見開2平麻]が漢語中古音では佳[見開2平佳]と音韻論的に対立する。この対は韻母でのみ違いがあり、残りの音韻論的要素は互いに同じだから、韻母の最小対である。4章で論ずるであろうが、漢語中古音ではこの最小対立が成立するから、麻韻と佳韻の韻腹に互いに異なる母音を配さなければならない。¹⁶⁾これに拠り、麻韻の韻腹は前舌母音 /e/ であるが、佳韻の韻腹は中舌低母音 /a/ と記述することになる。他方、高句麗語では麻韻と佳韻の最小対がない。これはこの2つの韻母の韻腹が弁別されなかったことを意味するから、この2つの韻母の韻腹に同じ母音 /a/ を配する。

(3.3)では戴[端開1去哈]と帝[端開4去齊]が韻母の音韻対立の対である。この時は「戴」が1等なのに比して「帝」が4等だから、韻母の最小対ではないように見える。韻母のみならず等呼でも違いがあるからである。しかし哈韻はいつも1等であり、齊韻はいつも4等という点を¹⁷⁾考慮すれば、実質的には韻母の最小対で

あると言える。この実質的最小対立を利用して哈韻と齊韻の韻腹に各々 /a/と/e/ 母音を配して音価を区別する。

(3.4~6)は漢語中古音の音価を下付き字と上付き字を活用して異なる表示をしたものである。この時は第1の位置に声母を置いたり開合を置いたりする。開合が中立的なものは「₃諸^L」のように表示しないで省略する。

古代漢字の音価を上のように表示し、ここにプラハ学派の音韻対立理論を適用することにする。適用に先立ってまず強調しておくべきことがある。古代語の音韻体系を再構する時には表音字全体を研究対象としなければならないという点である。いわゆる全数調査が前提とならなければ、多数の音韻対立が確認されるといっても、一部の音韻対立が落ちる可能性が大きい。

漢語上古音を再構する時に多く『詩經』の押韻字を活用したり諧聲字の聲符を活用する。ところでこの方法が持っている最大の短所は全数調査が前提とされないという点である。例えば、押韻字として使用されたことのない漢字や声符のない漢字については研究がまったく不可能である。そうして一部の音韻対立が記述対象から除かれる結果をもたらす。このような状況では音韻体系を全般的かつ体系的に再構することはできない。

われわれが論ずることになる百濟語、高句麗語、前期中古漢語の資料は全数調査を通じて集めたものであるから、既存の論議よりはるかに全般的かつ体系的に音韻体系を再構し得る。百濟語や高句麗語を記録した項目を網羅して集め、ここで表音字で使用したものを選び出せば、各々694(707)字と690(727)字に達する。5世紀前半の前期中古語を反映する『世説新語』の対話文では2,212(2,486)字を抽出した。

『世説新語』の2,212(2,486)字に比して百濟語と高句麗語の表音字が非常に少ないという印象を与える。しかし700字にもならないといえども、これらが厳格に選抜された表音字だという点が重要である。百濟や高句麗で自国語を記すために使用したものであるから、この表音字は事前言語調査を経て厳選した漢字の集合に例えることができる。即ち構造主義で強調する資料の典型性を備えたものである。他方『世説新語』の2,212(2,486)字は対話文で無作為に集めたものであるから、実際には自然発話に使用された漢字の集合のようなものである。従って百濟語、高句麗語の690余字は『世説新語』の2,212(2,486)字に比して量的には非常に少ないが、質的にはほとんど違いがない。¹⁸⁾

3. 子音の音韻対立

いまや古代漢字音をどのように研究するのか本格的に論ずることにする。ま

ず子音を中心に音韻対立理論を適用してみよう。

百濟語の表音字694(707)字のうち声母が唇音であるものをすべて集めてみると、次の105字が現れる。

(4) 百濟語表音字の唇音 (105字)

		全清	次清	全濁	不清不濁
唇音	幫組	幫p 20	滂p ^h 5	並b 16	明m 32
	非組	非f 12	敷f ^h 2	奉v 10	微m̥ 10

この105字を以下の (5)のように分布分析表に入れる。(5)で行に配列したのは韻であり、列に配列したのは声母である。韻の種類があまりに多くて、似た音価を持つ韻を1つのなかまに括ることとするのだが、これを撮という。唇音には上の (4)で示したように8個の声母(即ち子音)がある。この声母相互に音韻対立が成立したかがわれわれの関心事である。

上の (4)に示した幫組は重唇音系列であるが、現代音韻論の両唇閉鎖音にあたる。非組は軽唇音系列と呼び、唇歯摩擦音にあたる。この唇歯摩擦音が独自の音素だったのか、両唇閉鎖音の変異音だったのかが主要研究対象である。また全清(即ち無声無気音)と次清(即ち無声有気音)が音韻論的に対立したのか、全清と全濁(即ち有声無気音)が対立したのか等も非常に重要な研究対象である。

以下の分布分析表で不清不濁(または次濁、共鳴音)はわずらわしさを避けて韻母だけ下付きとして表示した。不清不濁の明母[m]と微母[m̥]の最小対があるのか検討すると、この2つがㄷ相補分布を成す。遇撮の行を例に挙げれば、明母は模韻の前に来るのに比して微母は虞韻の前に来る。

(5) 百濟語唇音の分布分析表

声母	全清		次清	全濁		不清不濁	
	幫p 20	非f 12	滂p ^h 5 敷f ^h 2	並b 16	奉v 10	明m 32	微m̥ 10
撮							
果撮 ^{歌戈}	1波 ^ㄱ _L					磨 ^ㄱ 摩 ^ㄱ	
假撮 ^麻	2巴 ^ㄴ _L					馬 ^ㄴ 麻 ^ㄴ	
遇撮 ^{模魚虞}		3父 ^ㄹ _R 3大 ^ㄹ _L	滂 ^ㄹ ₁ 浦 ^ㄹ _模 ^R	1菩 ^ㄹ _模 ^L 1蒲 ^ㄹ _模 ^L	3父 ^ㄹ _R 3輔 ^ㄹ _R 3扶 ^ㄹ _L	慕 ^ㄹ 模 ^ㄹ 模 ^ㄹ	亡 ^ㄹ _虞 母 ^ㄹ _虞 武 ^ㄹ _虞

效攝 <small>豪肴宵蕭</small>	1保 <small>豪</small> ^R					毛 <small>豪</small> 妙 <small>宵</small> 苗 <small>宵</small>	
流攝 <small>侯尤</small>		3富 <small>尤</small> ^D 3不 <small>尤</small> ^{L/R}		1部 <small>侯</small> ^R 1簿 <small>侯</small> ^R	3負 <small>尤</small> ^R	母 <small>侯</small> 茂 <small>侯</small> 牟 <small>尤</small>	
止攝 <small>支之微脂</small>	3比 <small>脂</small> ^D 3卑 <small>支</small> ^L 3泚 <small>脂</small> ^R	3非 <small>微</small> ^L 3沸 <small>微</small> ^D		3鼻 <small>脂</small> ^D 3毗 <small>脂</small> ^L 3皮 <small>支</small> ^L		彌 <small>支</small> 糜 <small>支</small>	未 <small>微</small> 味 <small>微</small> 尾 <small>微</small>
蟹攝 <small>哈灰泰齊 祭夫佳</small>	1背 <small>灰</small> ^D 1涖 <small>泰</small> ^D			1背 <small>灰</small> ^D		邁 <small>夫</small> 昧 <small>灰</small> 買 <small>佳</small>	
梗攝 <small>庚清青</small>	2伯 <small>庚</small> ^E 3碧 <small>庚</small> ^E 3兵 <small>庚</small> ^L 3辟 <small>清</small> ^E			2白 <small>庚</small> ^E 3苜 <small>庚</small> ^E 3平 <small>庚</small> ^L		冥 <small>青</small> 明 <small>庚</small> 鳴 <small>庚</small> 命 <small>庚</small> 名 <small>清</small>	
咸攝 <small>談覃鹽嚴 凡咸銜添</small>		3法 <small>凡</small> ^E			3範 <small>凡</small> ^R		
山攝 <small>寒桓先仙 元山</small>	1半 <small>桓</small> ^D 2八 <small>山</small> ^E 3別 <small>仙</small> ^E	3發 <small>元</small> ^E	滂 <small>3</small> 泮 <small>桓</small> ^D 滂 <small>3</small> 潘 <small>桓</small> ^L	3卜 <small>仙</small> ^D 3辨 <small>仙</small> ^R 3辯 <small>仙</small> ^R 3別 <small>仙</small> ^E	3伐 <small>元</small> ^E	滿 <small>桓</small> 木 <small>桓</small> 免 <small>仙</small> 面 <small>仙</small> 眠 <small>先</small>	萬元
宕攝 <small>唐陽</small>	1博 <small>唐</small> ^E	3方 <small>陽</small> ^L	敷 <small>3</small> 芳 <small>陽</small> ^L	1薄 <small>唐</small> ^E		莫 <small>唐</small>	亡 <small>陽</small>
江攝 <small>江</small>							
深攝 <small>侵</small>							
臻攝 <small>魂欣真文 痕諄</small>	1本 <small>魂</small> ^R 1棟 <small>魂</small> ^R 3賓 <small>真</small> ^L	3分 <small>文</small> ^L 3不 <small>文</small> ^E 3弗 <small>文</small> ^E			3潰 <small>文</small> ^L 3汾 <small>文</small> ^L	門 <small>魂</small>	文 <small>文</small> 汶 <small>文</small> 勿 <small>文</small>
曾攝 <small>登蒸職</small>	1北 <small>登</small> ^E						
通攝 <small>東鍾冬</small>		3福 <small>東</small> ^E	敷 <small>3</small> 豐 <small>東</small> ^L		3服 <small>東</small> ^E 3伏 <small>東</small> ^E	木 <small>東</small> 目 <small>東</small> 沐 <small>東</small>	

遇攝の行の明母の「慕」字と微母の「亡」字の音価をすべて記述すれば、各々「明₁慕₃^D」と「微₃亡₃^L」となる。この対は声母でも違いがあり、韻母でも違いがあるから、最小対ではない。われわれは漢字音の5つの音韻論的要素の中でただの1個所で違いがある時にのみ最小対立という用語を使用する。

最小対立成立の可否をもっと分かりやすく、(5)の分析表示で遇攝のみを特に取り出して2章の(2)のように表せば、以下の(6)の如くである。

(6) 百濟語の明母と微母の分布分析表 - 遇攝

攝		声母		全清		次清		全濁		不清不濁	
		幫p	非f	滂p ^h 5 敷f ^h 2	並b	奉v	明m	微m			
	模韻	20	12			滂 ₁ 滂 ^R _模	並 ₁ 並 ^L _模	奉 ₁ 奉 ^L _模		明 _模	微 _模
遇攝	虞韻			3父 ^R _虞 3夫 ^L _虞				3父 ^R _虞 3輔 ^R _虞 3扶 ^L _虞			亡 _虞 母 _虞 武 _虞

(6)では遇攝で模韻の行と虞韻の行とを分かち合っている。このように韻母を分離して互いに他の行に配列すれば、「慕_模、謨_模」と「亡_虞、母_虞、武_虞」が互いに他の行に来る。このように互いに他の行に来たものは最小対立を成さない。明母は模韻の前に来、虞韻の前には来ない。他方、微母は模韻の前には来ず、虞韻の前には来る。これは言い換えれば、明母と微母が相補分布であることを意味する。このように相補分布であるものは1つの音素に合わさるから、明母・微母にまとめ、その音価を /m/と推定する。

今度は分布分析表 (5)で次清（無声有気音）の列に来た滂母[p^h]と敷母[f^h]が音韻論的に対立するかをまず検討する。¹⁹⁾ この列の山攝の行には「滂₁滂^D_山」と「滂₁滂^L_山」が同じ枠に来ている。ところでこの対は声母の最小対ではなく、声調の最小対である。声母が滂母で同じなのに反して、声調で「滂」は去声であり、「滂」は平声である。この対を除けば、滂母[p^h]と敷母[f^h]が同じ枠に来ない。これは滂母[p^h]と敷母[f^h]の声母の最小対がないという意味である。

このような方法で、分布分析表 (5)で全清（即ち無声無気音）の幫母[p]と非母[f]の最小対だったかを求めよう。ここでも常に声母だけでなく韻母でも違いがある。即ち、幫母と非母の最小対がない。そうであるなら幫母と非母を一つにまとめて幫母・非母/p/とし得る。

全濁（即ち有声無気音）でもこれを確認しよう。分布分析表 (5)で並母[b]と奉母[v]が同じ行に来ることを求めてその韻母が同じなのか対比すれば、常に韻母が互いに異なる。これは並母と奉母の最小対がないことを意味するので、この2つを1つの音素にまとめ、並母・奉母/b/にまとめる。

今までの論議を総合すれば、百濟語では重唇音（両唇閉鎖音）と軽唇音（唇歯摩擦音）の音韻論的対立がなかったという結論が出て来る。この点では百濟語、高句麗語、前期中古漢語が互いに一致する。

ところでここで論議が終わるのではない。先に幫母・非母/p/、並母・奉母/b/、

明母・微母/m/ 等がまるで音素の特徴を持つもののように記述したが、いまだ経なければならない段階が残っている。これら相互に音韻対立が成立するのかささらに確認することである。併せて次清(無声有気音) 滂母・敷母[pʰ]が音素の資格を持っているのかも論じなければならない。従ってこれら相互の最小対が存在するかを必ず検討しなければならない。

まず、幫母・非母が滂母・敷母と同じ列に来て韻、聲調、開合、等呼の4つの要素がすべて一致する表音字があるかを分布分析表 (5)で求めれば、以下の2対が出て来る。(7.1)の表音字「半」と「泮」は声母でのみ違いのある最小対であることが分明である。同じく、(7.2)の「方」と「芳」も声母の最小対である。

(7) 幫母・非母と滂母・敷母の最小対

1. 山攝の桓韻- 幫₁半_桓^D: 滂₁泮_桓^D
2. 宕攝の陽韻- 非₃方_陽^L: 敷₃芳_陽^L

ところで百濟語の対立項「泮」と「芳」に問題がある。「泮」は「沙泮(王)」にただの1回用いられているが、これが『三國史記』と『三國遺事』に出て来る。この王名は元来は「仇首王在位二十一年薨、長子沙伴嗣位」(『三國史記』古爾王即位条)の²⁰「沙伴」として表記されたものだが、統一新羅以後「沙泮(王)」に変えられたものである。即ち左辺の「イ」の行書体を後代に「ヰ」と間違えて判読したものである。日本の『新撰姓氏録』ではこの王名を「沙半王」と表記している(장세경 Jang Segyeong チャン・セギョン 2007: 530)。従ってこの王名の「泮」を「伴」または「半」と修正する必要がある。この修正によれば、(7.1)の最小対がなくなる。(7.2)の対立項は「芳」も『三國史記』と『三國遺事』の「阿芳」にのみ用いられる。「阿芳」は「阿莘(王)」の異なる表記であるから、誤字である可能性がある。『三國史記』ですでに「阿莘王[或云阿芳]枕流王之元子」(『三國史記』百濟本記第3)とし、「阿芳」を捨てて「阿莘」を取っている。これにより「芳」を百濟語の表音字から除けば (7.2)の最小対がなくなる。

このように (7)の対立項たる「泮」と「芳」は誤字である可能性が大きい。誤字である可能性のある大きいものは表記字から除く方が安全である。この態度によれば、百濟語で幫母・非母と滂母・敷母が音韻論的に対立したという証拠がなくなる。最小対がないので、この2つを1つの音素である幫母・非母・滂母・敷母/p/にまとめる。

次に、幫母・非母・滂母・敷母が並母・奉母と音韻論的に対立したかを検討しよう。このために、分布分析表 (5)で同じ行に来たものの中で声母だけが違う最小対立を求めれば、次の如くである。

(8) 幫母・非母・滂母・敷母と並母・奉母の最小対と出典²¹⁾

1. 遇攝の虞韻- 非_c夫虞^L: 禿_c扶虞^L {木, 中, 日, 地, 史}: {地, 唐, 史, 遺}
2. 止攝の脂韻- 幫_A比脂^D: 並_A鼻脂^D {木, 日, 地, 史, 遺}: {日}
3. 梗攝の庚韻- 幫₂伯庚^E: 並₂白庚^E {馬, 地, 史, 遺}: {木, 日}
4. 梗攝の庚韻- 幫_B兵庚^L: 並_B平庚^L {唐, 史}: {中, 日, 地, 唐, 史, 遺}
5. 臻攝の文韻- 非_c分文^L: 禿_c潰文^L {木, 日, 地}: {馬}
6. 臻攝の文韻- 非_c分文^L: 禿_c汾文^L {木, 日, 地}: {史, 遺}
7. 通攝の東韻- 非_c福東^E: 禿_c服東^E {日, 唐, 史, 遺}: {日, 史}
8. 通攝の東韻- 非_c福東^E: 禿_c伏東^E {日, 唐, 史, 遺}: {地}

上の8対のうち百濟が滅亡する以前のテキストにすでに記録されて信頼度の高いのは (8.1), (8.3), (8.5)の3対である. (8.1)の対立項「夫」は百濟木簡と滅亡以前の中国史書で用いられ, 対立項「扶」は中国史書で用いられた. (8.3)の「伯」と「白」は各々『三國志』魏書東夷伝の馬韓国名と百濟木簡に用いられ, (8.5)の「分」と「潰」は各々百濟木簡と馬韓国名に用いられている. この3対は百濟が滅亡する以前のテキストに幫母・非母・滂母・敷母と並母・奉母が音韻論的に対立したことを示している. この最小対を論拠として, 百濟語で幫母・非母・滂母・敷母と並母・奉母が各々音素 /p/と音素 /b/だったと言えるのである.

結論として, 百濟語の唇音には全清, 次清の幫母・非母・滂母・敷母/p/, 全濁の並母・奉母/b/, 不清不濁の明母・微母/m/の3子音があった.²²⁾ 現代音韻論の用語に置き換えれば, 百濟語の唇音には無声無気音 /p/, 有声無気音 /b/, 鼻音 /m/の3子音があった. これは高句麗語でも同じである.

今百濟語の分析方法と同じ方法で『世説新語』対話文の用字の唇音を分析することにする. 不清不濁の明母と微母が相補分布を成すことは2章の分布分析表(2)を通じてすでに論じたので, ここでは全清字, 次清字, 全濁字の分布分析表だけを提示することにする. ここでは重唇音と軽唇音が音韻論的に対立したのか, 全濁と全清が対立したのか等が関心事である.

(9) 『世説新語』(2,212/2,486字)唇音の全清字, 次清字, 全濁字の分布

唇音 攝	全清		次清		全濁	
	幫p 86	非f 33	滂p ^h 25	敷f ^h 21	並b 65	奉v 46
果攝 歌 ₁ 戈 ₁	1波 _戈 ^L 1播 _戈 ^D 1簸 _戈 ^D 1番 _戈 ^{LD}		1頗 _戈 ^{L/R} 1破 _戈 ^D		1婆 _戈 ^L	

假攝 麻2,3	2把 ^麻 R				2琶 ^麻 L	
遇攝 模1 魚3 虞3	1哺 ^模 L 1補 ^模 R 1布 ^模 D	3膚 ^虞 L 3夫 ^虞 L 3府 ^虞 R 3父 ^虞 R 3甫 ^虞 R 3賦 ^虞 D 3富 ^虞 D 3傅 ^虞 D	1普 ^模 R	3敷 ^虞 L 3孚 ^虞 L 3撫 ^虞 R 3赴 ^虞 D	1蒲 ^模 L 1蒲 ^模 L 1簿 ^模 R 1步 ^模 D 1哺 ^模 D	3符 ^虞 L 3扶 ^虞 L 3馱 ^虞 L 3梟 ^虞 L 3輔 ^虞 R 3父 ^虞 R 3腐 ^虞 R 3釜 ^虞 R 3附 ^虞 D
效攝 豪1 肴2 宵3	1保 ^豪 R 1寶 ^豪 R 1報 ^豪 D 1苞 ^肴 L 2飽 ^肴 R 2豹 ^肴 D 3標 ^宵 R 3表 ^宵 R			3飄 ^宵 L	1抱 ^豪 R 1暴 ^豪 D 3驃 ^宵 D	
流攝 侯1 尤3	3彪 ^尤 L	3不 ^尤 L/R 3否 ^尤 R		3副 ^尤 D 3覆 ^尤 D	1衰 ^侯 L 1部 ^侯 R 1瓠 ^侯 R	3浮 ^尤 L 3負 ^尤 R 3婦 ^尤 R 3阜 ^尤 R 3復 ^尤 D 3復 ^尤 D
止攝 之3 微3 支3 脂3	3彼 ^支 R 3跛 ^支 L 3卑 ^支 L 3算 ^支 R 3臂 ^支 D 3鄙 ^脂 R 3比 ^脂 D 3秕 ^脂 R 3庇 ^脂 D	3非 ^微 L 3飛 ^微 L 3篋 ^微 R	3披 ^支 L 3辟 ^支 D 3譬 ^支 D	3霏 ^微 L 3費 ^微 D	3皮 ^支 L 3疲 ^支 L 3彼 ^支 R/D 3避 ^支 D 3辟 ^支 D 3婢 ^支 R 3備 ^脂 D 3琵琶 ^支 L 3鼻 ^脂 D	3肥 ^微 L
蟹攝 咍1 灰1 泰1 皆2 佳2 夬2 齊4 祭3	1背 ^灰 D 1輩 ^灰 D 1柝 ^灰 D 1狽 ^泰 D 2拜 ^皆 D 3蔽 ^祭 D 2擺 ^佳 R	3廢 ^夬 D	1培 ^灰 L 1裴 ^灰 L 1配 ^灰 D		1背 ^灰 D 1悖 ^灰 D 1佩 ^灰 D 1倍 ^灰 R/D 2敗 ^夬 D 2罷 ^佳 R 2排 ^皆 L A弊 ^祭 D 4陞 ^齊 R	
梗攝 庚2,3 清3 青4	2伯 ^庚 E 2百 ^庚 E 2迫 ^庚 E 3兵 ^庚 L 3秉 ^庚 R 3柄 ^庚 D 2柏 ^庚 E 3甃 ^清 R 3屏 ^清 R 3滂 ^清 E		2烹 ^庚 L 2泊 ^庚 E 2魄 ^庚 E 2拍 ^庚 E 3聘 ^清 D		2白 ^庚 E 3平 ^庚 L 3評 ^庚 L 3病 ^庚 D 3辟 ^清 E 4滂 ^清 L 4屏 ^清 L 4竝 ^清 R	

	3壁清 ^E 4壁寺 ^E 3并清 ^{L/D}					
咸攝 談1 覃1 鹽3 嚴3 凡3 咸3 銜 添	3貶鹽 ^R	3法凡 ^E		3汎凡 ^D		3凡凡 ^L 3犯凡 ^R 3范凡 ^R 3範凡 ^R 3乏凡 ^E 3颿威 ^L 3颿凡 ^D
山攝 寒1 桓1 先4 仙3 元3 山2	1半桓 ^D 1撥桓 ^E 1鉢桓 ^E 2八山 ^E 2班刪 ^L 2斑刪 ^L 2頒刪 ^L 2攀刪 ^L 2版刪 ^R 3蕃元 ^L 3鞭仙 ^L 3變仙 ^D 3別仙 ^E 4邊先 ^L 4遍先 ^D	3反元 ^R 3返元 ^R 3發元 ^E 3髮元 ^E	1判桓 ^D 1潘桓 ^L 1番桓 ^L 3番元 ^L 3偏仙 ^L 4瞥先 ^E	3反元 ^L	1盤桓 ^L 1叛桓 ^D 2辦山 ^D 2拔刪 ^E 3卞仙 ^D 3辨仙 ^R 3辯仙 ^R 3別仙 ^E 3便仙 ^{L/D} 4胼先 ^L	3煩元 ^L 3樊元 ^L 3繁元 ^L 3番元 ^L 3蕃元 ^L 3飯元 ^{R/D} 3伐元 ^E
宕攝 唐1 陽3	1榜唐 ^R 1謗唐 ^D 1博唐 ^E	3方陽 ^L 3放陽 ^D		3芳陽 ^L 3妨陽 ^{L/D} 3仿陽 ^R	1傍唐 ^L 1薄唐 ^E 1簿唐 ^E	3房陽 ^L 3防陽 ^L 3縛陽 ^E
江攝 江2	2邦江 ^L		2璞江 ^E			
深攝 侵AB	3稟侵 ^R		3品山侵 ^R			
臻攝 魂1 痕1 欣3 文3 眞3 諄3	1本魂 ^R 1奔魂 ^L 1賁魂 ^L 3筆眞 ^E 3賓眞 ^L 3殯眞 ^D 3鬢眞 ^D 3必眞 ^E 3畢眞 ^E 3彪眞 ^平	3分文 ^L 3奮文 ^D 3糞文 ^D 3不文 ^E	3匹眞 ^E	3紛文 ^L 3拂文 ^E	1勃魂 ^E 3貧眞 ^L 3佛眞 ^E 3弼眞 ^E	3焚文 ^L 3墳文 ^L 3分文 ^D 3佛文 ^E
曾攝 登1 蒸3 職	1崩登 ^L 1北登 ^E 3逼蒸 ^E 3冰蒸 ^平				1朋登 ^L 3憑蒸 ^L 3悞蒸 ^E	
通攝 東1,3 鍾3 冬	1卜東 ^E	3風東 ^{L/D} 3楓東 ^L 3諷東 ^D 3腹東 ^E		3豐東 ^L 3覆東 ^E 3鋒鍾 ^L 3蜂鍾 ^L	1蓬東 ^L 1僕東 ^E 1暴東 ^E	3馮東 ^L 3汎東 ^L 3鳳東 ^D 3伏東 ^E

		3福 ^東 ^E 3封 ^鍾 ^L		3峯 ^鍾 ^L		3復 ^東 ^E 3服 ^東 ^E 3馥 ^東 ^E 3逢 ^鍾 ^L 3奉 ^鍾 ^R
--	--	--	--	------------------------------	--	--

この分析表で全清の幫母[p]と非母[f]の分布を検討すれば、幫母の後ろに来る韻母と非母の後ろに来る韻母が大部分互いに異なる。通攝の東韻で幫母だけでなく非母の後ろに東韻が来たものだけが例外である。ところで幫母の後ろに来た東韻は1等であるのに比して、非母の後ろに来た東韻はすべて3等である。「幫₁ト^東^E」と「非₃腹^東^E」は声母だけでなく等呼でも違いがあるので、これは最小対ではない。要するに、幫母と非母の最小対がないのである。従って5世紀前半の漢語でも幫母[p]と非母[f]を一つにまとめて幫母・非母/p/とし得るのである。

次に、次清の滂母[pʰ]と敷母[fʰ]の分布を対比してみる。上の分析表でまさに表れているように、敷母の字は常に3等である。他方、滂母の字には3等のものが山攝の「滂₃番^元^L」1つしかない。この「滂₃番^元^L」と同じ行に来た非母の「非₃反^元^L」が声母の最小対のようであり、人目を引くが、これは最小対ではない。「番」は多音字（または破音字）に属し、「滂₃番^元^L」と「滂₁番^桓^L」の2つの音価である。この2つは上の分析表で同じ枠に来るのだが、「滂₁番^桓^L」が起源的な音価であり、「滂₃番^元^L」は後に分化して現れた音価だと言える。「滂₁番^桓^L」の桓韻は夙に座を占めた韻であるが、「滂₃番^元^L」の元韻は後代に起こった音韻変化を反映する韻である。従って5世紀前半には「番」の音価が「滂₁番^桓^L」だった可能性が大きい。この音価を択べば、滂母[pʰ]と敷母[fʰ]の最小対がなくなる。この2つの声母が相補分布を成すので、この2つを1つに合わせて滂母・敷母/pʰ/とし得る。

今度は、全濁の並母[b]と奉母[v]の分布を対比する。分布分析表(9)で並母と奉母が相補分布を示す。従ってこの2つを1つの音素並母・奉母/b/にまとめることができる。

今まで、唇音の閉鎖音に全清の幫母・非母/p/、次清の滂母・敷母/pʰ/、全濁の並母・奉母/b/の3子音があることを論じた。ところでこれら相互に最小対があるということがさらに確認されて初めてこれらを各々独自の音素に登録し得るのである。

分布分析表(9)でまず幫母・非母/p/と滂母・敷母/pʰ/の最小対を求めると、次の如くである。多音字（または破音字）が対立項であるものをすべて除いても、最小対がなんと40対にのぼる。わずらわしさを避けていくつかの例だけを示す(以下同)。

(10) 幫母・非母/p/と滂母・敷母/p^h/の最小対 (40対)

1. 果攝の戈韻- 幫₁播戈^D, 幫₁簸戈^D: 滂₁破戈^D (2対)
2. 遇攝の模韻- 幫₁補模^R: 滂₁普模^R (1対)
3. 止攝の微韻- 非₃非微^L, 非₃飛微^L: 敷₃非微^L (2対)
4. 蟹攝の灰韻- 幫₁背灰^D, 幫₁輩灰^D: 滂₁配灰^D (2対)
5. 梗攝の庚韻- 幫₂伯庚^E, 幫₂百庚^E, 幫₂迫庚^E: 滂₂泊庚^E, 滂₂魄庚^E, 滂₂拍庚^E (9対)
6. 山攝の桓韻- 幫₁半桓^D: 滂₁判桓^D (1対)
7. 宕攝の陽韻- 非₃方陽^L: 敷₃芳陽^L (1対)
8. 深攝の侵韻- 幫₃稟侵^R: 滂₃品侵^R (1対)
9. 臻攝の文韻- 非₃分文^L: 敷₃紛文^L (1対)
10. 通攝の東韻- 非₃楓東^L: 敷₃豊東^L (1対)
11. 通攝の鍾韻- 非₃封鍾^L: 敷₃鋒鍾^L, 敷₃蜂鍾^L, 敷₃峯鍾^L (3対)

このように多量の最小対を求め得るから、5世紀前半の漢語では幫母・非母/p/と滂母・敷母/p^h/が音韻論的に対立したことが分明である。先にすでに論じたように、百濟語と高句麗語ではこの音韻対立がなかった。

次に、分布分析表 (9)で全清の幫母・非母/p/と全濁の並母・奉母/b/の最小対を求めよう。少なく見積もっても84対がの最小対を求め得る。

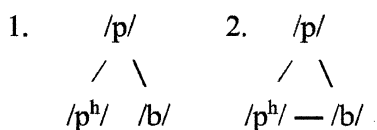
(11) 幫母・非母/p/と並母・奉母/b/の最小対 (84対)

1. 果攝の戈韻- 幫₁波戈^L: 並₁婆戈^L (1対)
2. 遇攝の模韻- 幫₁哺模^L: 並₁蒲模^L, 並₁蒲模^L (2対)
3. 效攝の豪韻- 幫₁保豪^R, 幫₁寶豪^R: 並₁抱豪^R (2対)
4. 流攝の尤韻- 非₃否尤^R: 奉₃負尤^R, 奉₃婦尤^R, 奉₃阜尤^R (3対)
5. 止攝の微韻- 非₃非微^L, 非₃飛微^L: 奉₃肥微^L (2対)
6. 蟹攝の祭韻- 幫₃蔽祭^D: 並₃弊祭^D (1対)
7. 梗攝の庚韻- 幫₂伯庚^E, 幫₂百庚^E, 幫₂迫庚^E: 並₂白庚^E, 並₂帛庚^E (6対)
8. 咸攝の凡韻- 非₃法凡^E: 奉₃乏凡^E (1対)
9. 山攝の元韻- 非₃發元^E, 非₃髮元^E: 奉₃伐元^E (2対)
10. 宕攝の唐韻- 幫₁博唐^E: 並₁薄唐^E, 並₁簿唐^E (2対)
11. 深攝の侵韻- 幫₃稟侵^R: 並₃品侵^R (1対)
12. 臻攝の眞韻- 幫₃筆眞^E: 並₃佛眞^E, 並₃弼眞^E (2対)
13. 曾攝の蒸韻- 幫₃逼蒸^E: 並₃悞蒸^E (1対)
14. 通攝の東韻- 非₃腹東^E, 非₃福東^E: 奉₃伏東^E, 奉₃復東^E, 奉₃服東^E, 奉₃馥東^E (8対)

そうならば5世紀前半の漢語で幫母・非母/p/と並母・奉母/b/が音韻論的に対立する要素だったと言える。この音韻対立は百濟語と高句麗語にもあった。

プラハ学派の音韻対立理論では /p/が /p^h/と音韻論的に対立し、さらに /p/が /b/と対立すれば、 /p/, /p^h/, /b/の3音素が三項の相関を成すとして、3音素相互の関係を以下の (12.1)のように表示する。音韻対立が成立する音素を直線で結ぶと、/p^h/と /b/の音韻対立が成立するかは確認しない。この2つは多面的対立関係であるからである。

(12) 三項的相関



しかしわれわれは (12.2)のように /p^h/と /b/の音韻対立まで確認されて初めて3項的相関が成立すると見る(이승재李丞宰 2013: 193~4). この態度により、滂母・數母/p^h/と並母・奉母/b/の最小対があるのか検討することとする.²³⁾ 以下に見るように、少なくとも58対で滂母・數母/p^h/と並母・奉母/b/が最小対立を成す。従って滂母・數母/p^h/と並母・奉母/b/が各々独自の音素であったことが分明である。

(13) 滂母・數母/p^h/と並母・奉母/b/の最小対 (58対)

1. 果攝の戈韻- 滂₁頗_戈^{L/R}: 並₁婆_戈^L (1対)
2. 遇攝の虞韻- 數₃數_虞^L, 數₃孚_虞^L: 奉₃扶_虞^L, 奉₃符_虞^L, 奉₃梟_虞^L, 奉₃瓠_虞^L (8対)
3. 流攝の尤韻- 數₃副_尤^D, 數₃覆_尤^D: 奉₃復_尤^D, 奉₃複_尤^D (4対)
4. 止攝の支韻- 滂₃辟_支^D, 滂₃譬_支^D: 並₃避_支^D, 並₃辟_支^D (4対)
5. 梗攝の庚韻- 滂₂泊_庚^E, 滂₂魄_庚^E, 滂₂拍_庚^E: 並₂白_庚^E, 並₂帛_庚^E (6対)
6. 咸攝の凡韻- 數₃汎_凡^D: 奉₃飄_凡^D (1対)
7. 山攝の元韻- 數₃反_元^L: 奉₃煩_元^L, 奉₃樊_元^L, 奉₃繁_元^L, 奉₃番_元^L, 奉₃蕃_元^L (5対)
8. 宕攝の陽韻- 數₃芳_陽^L: 奉₃房_陽^L, 奉₃防_陽^L (2対)
9. 臻攝の文韻- 數₃紛_文^L: 奉₃焚_文^L, 奉₃墳_文^L (2対)
10. 通攝の東韻- 數₃覆_東^E: 奉₃伏_東^E, 奉₃復_東^E, 奉₃服_東^E, 奉₃馥_東^E (4対)

そうならば、『世説新語』が反映している5世紀前半の漢語では幫母・非母/p/, 滂母・數母/p^h, 並母・奉母/b/の3つがすべて音素だったと確信し得る。ここに不

清不濁の明母・微母/m/を加えれば、唇音は総4個である。この4つは相互の音韻対立関係を論証したものであるから、音素であることが間違いない。

われわれは今まで同じ音韻体系を適用して百濟語と前期中古語を分析した。即ち漢語中古音の音韻体系を利用して百濟語と前期中古漢語の唇音を分析したのだが、分析の結果は互いに異なって現れる。前期中古漢語は両唇音が /p/, /pʰ/, /b/, /m/の4個なのに反して、百濟語は /p/, /b/, /m/の3個である。これは同じ音韻体系である漢語中古音として分析するとして同じ子音目録が導き出されるのではないことを語っている。言い換えれば、同じ音韻体系を適用するとしても、分析対象である漢字の集合が互いに異なれば、互いに異なる音素目録が導き出される。上では唇音を分析対象としたが、舌音、齒音、牙音、喉音等も分析してみても結論は同じである。分析対象である母集団が互いに異なれば、導き出される音素目録もまた異なるのである。

われわれの分析方法が既存の古代漢字音の研究方法与異なる点は3つに要約し得る。

第1に、われわれは分布分析表を活用して相補分布か否かを明示的に非常に簡単に表し示すことができる。百濟語対象の (5)や漢語対象の (9)のように総合的かつ効果的な分布分析表は既存の研究方法では提示されたことがないのである。²⁴⁾

第2に、既存の研究では声母の最小対を提示しないまま、論議を進める時が多かった。そうして幫母・非母、滂母・敷母、並母・奉母の音価を各々 p, pʰ, bとしつつも、これに音価の資格を付与し得なかった。他方、われわれは分布分析表を活用してこれら3つ相互間に最小対があるのかをまさに確認し得るのである。前期中古漢語では幫母・非母/p/, 滂母・敷母/pʰ/, 並母・奉母/b/の3つの音素が音韻論的に対立した。しかし百濟語では滂母・敷母[pʰ]が独自の音素ではなく幫母・非母・滂母・敷母/p/の変異音に過ぎなかった。要するに、既存の研究では音素と変異音を区別しなかったが、われわれはこの2つを厳格に区別し得るのである。

第3に、われわれは音素を漏れなく検証することができる。同じ押韻や同じ声符を活用し、漢字音の音韻を研究する時には一部の音素が目録から漏れ落ちる可能性が大きい。押韻字として用いられたことがないとか声符が最初からない漢字を記述対象から除くほかないからである。これとは異なり、われわれの音韻対立理論では漏れ落ちる音素がない。全数調査を通じて用字をすべて確保した後には音素論的対立を確認し、音素を登録するからである。

Karlgrenはプラハ学派の音韻対立理論を知っていたが、これを極端に批判した。「音素的言語描写は時々一面的にして過度に単純化される。このような方法は今やすぐ没落の道に入るであろう」と確信した(칼그렌Karlgren(崔玲愛譯) 1985: 233)。²⁵⁾ 彼が音素的描写を無にして音声的描写に過度に没頭したのは韻図の記

述中心に重点を置いたためである。韻図に136個の韻母があるならば、これらの音価が互いに違わなければならないという一種の強迫観念のようなものがあつたようである。相補分布を示す対立項を探し出し、部分的に漢字音研究に活用しつつも、彼はついに最小対を論じなかった。韻図対象の研究では最小対を探し出す必要もなく、探し出すことが実際に容易ではない。

しかし自然言語の分析に目標を置くならば、事情が異なる。この時は相補分布は勿論、最小対の有無を論じ、音素を設定し得るのである。これが最も速い近道である。われわれは韻図を研究することに目標を置かずに、高句麗語、百濟語、前期中古漢語等の自然言語を分析することに目標を置いたから、当然この道を選ぶのである。そうして(5)や(9)のような分布分析表を作成し、これを土台として相補分布と最小対を体系的かつ効果的に探し出す。その方法を提示したという点でわれわれの研究方法は既存の研究と大きく異なるのである。

4. 母音の音韻対立

漢字音の母音を研究する方法も子音の研究方法与異なるところがない。相補分布と最小対を中心に漢字音の母音音素も求めることができる。母音音素を登録する時には韻の音韻対立の対のうち韻腹の最小対を求めればよい。

韻の分析に入る前にあらかじめ言うておくことがある。音韻を分析する時は声母と声調が音韻論的環境となるという点である。漢語中古音の声調は平、上、去、入の四声だから、これを分析表の列に配列することにする。他方、声母は分析表の行に配列することになるのだが、この時は変異音を含む36~42字母をすべて音韻論的環境として活用するべきか、そうでなければ音素の資格を持つ子音だけを音韻論的環境とするべきかという問題が提起される。われわれは音韻論的対立の価値を重視するから、当然音素の資格を持つ子音だけを環境として活用する。従つてわれわれの研究方法では韻の分析が常に声母の分析の後になる。声母分析の結果を韻の分析にすぐ活用するからである。

韻の分析に先立って音素として登録される声母を確定しなければならないが、ここでは便宜上その結果だけを提示することにする。『世説新語』の資料を分析した結果、5世紀前半の漢語には28個の子音と1個のわたり音、即ち羊母/j/があつた。総29の音素なのだが、これを韻母分析の環境として活用する。分布分析表の行にはこの音素を配列する。

(14) 『世説新語』子音音素の略称

1. 幫母.非母→ 幫母/p/
2. 滂母.敷母→ 滂母/pʰ/

3. 並母.奉母→ 並母/b/ 4. 明母.微母→ 明母/m/
 5. 端母.知母→ 端母/t/ 6. 透母.徹母→ 透母/tʰ/
 7. 定母.澄母→ 定母/d/ 8. 泥母.娘母.日母→ 泥母/n/
 9. 來母/l/ 10. 心母/s/
 11. 邪母/z/ 12. 生母/ʃ/
 13. 書母/ɕ/ 14. 常母/ʒ/
 15. 羊母/j/ 16. 精母/ʦ/
 17. 清母.初母→ 清母/tʰ/ 18. 從母/dʒ/
 19. 莊母/tʃ/ 20. 章母/tʂ/
 21. 昌母/tʃʰ/ 22. 船母.崇母→ 船母/dʒ/
 23. 見母/k/ 24. 溪母/kʰ/
 25. 群母/g/ 26. 疑母/ŋ/
 27. 影母/?/ 28. 曉母/h/
 29. 匣母.云母→ 匣母/ɦ/

われわれの韻母の分析方法を提示するために、果攝と假攝を例とした。この2攝は現代音韻論に言い換えれば、韻腹が [-high]である母音であり、韻尾がないという共通性を持つから、いっぺんに記述することにする。『世説新語』の2,212(2,486)字を対象として果攝と假攝に属する用字をすべて抽出すれば、歌韻23字、戈韻21字、麻韻61字が出て来る。これらを分布分析表に入れると、次の如くである。

(15) 『世説新語』(2,212/2,486字) 果攝字と假攝字の分布分析表

声母		声調			
		平声 ^L	上声 ^R	去声 ^D	入声
唇音	幫母/p/	1波 ^戈 1番 ^戈	2把 ^麻 1	播 ^戈 1簸 ^戈 1番 ^戈	
	滂母/pʰ/	1頗 ^戈	1頗 ^戈	1破 ^戈	
	並母/b/	1婆 ^戈 2琶 ^麻			
	明母/m/		2馬 ^麻	2罵 ^麻	
舌音	端母/t/	開 ₁ 多 ^歌	開 ₂ 打 ^麻		
	透母/tʰ/	開 ₁ 他 ^歌			
	定母/d/	開 ₁ 陀 ^歌 開 ₂ 茶 ^麻	合 ₁ 墮 ^戈		
	泥母/n/	開 ₁ 那 ^歌	開 ₃ 若 ^麻	開 ₁ 奈 ^歌 合 ₁ 懦 ^戈	
	來母/l/	開 ₁ 羅 ^歌	開 ₁ 劬 ^歌		

齒音 摩擦	心母/s/	開 ₁ 娑歌 合 ₁ 撒戈	開 ₃ 寫麻	開 ₃ 瀉麻	
	邪母/z/	開 ₃ 邪麻		開 ₃ 謝麻	
	生母/ʃ/	開 ₂ 沙麻 開 ₂ 娑麻			
	書母/ɕ/		開 ₃ 捨麻	開 ₃ 舍麻	
	常母/z/	開 ₃ 閤麻	開 ₃ 社麻		
	羊母/j/	開 ₃ 邪麻 開 ₃ 耶麻	開 ₃ 也麻 開 ₃ 野麻 開 ₃ 治麻	開 ₃ 射麻 開 ₃ 夜麻	
齒音 破擦	精母/ts/		開 ₁ 左歌	開 ₁ 佐歌 開 ₃ 借麻	
	清母/ts ^h /	開 ₁ 蹉歌 開 ₂ 差麻	開 ₃ 且麻		
	從母/dz/		合 ₁ 坐戈	合 ₁ 坐戈 開 ₃ 藉麻	
	莊母/tʂ/	開 ₂ 檀麻			
	章母/tʂ/		開 ₃ 者麻		
	昌母/ts ^h /	開 ₃ 車麻			
牙音	船母/dʒ/	開 ₃ 蛇麻 開 ₂ 苴麻		開 ₃ 射麻	
	見母/k/	開 ₁ 歌歌 開 ₁ 柯歌 開 ₂ 加麻 開 ₂ 嘉麻 開 ₂ 家麻 合 ₂ 瓜麻	合 ₁ 果戈 開 ₂ 假麻 合 ₂ 寡麻	合 ₁ 過戈 開 ₂ 假麻 開 ₂ 架麻 開 ₂ 價麻 開 ₂ 賈麻 開 ₂ 嫁麻	
	溪母/k ^h /		開 ₁ 可歌		
	群母/g/				
	疑母/ŋ/	開 ₁ 俄歌 開 ₁ 峨歌 開 ₂ 牙麻	開 ₁ 我歌 開 ₂ 雅麻 合 ₂ 瓦麻	合 ₁ 臥戈	
	喉音	影母/?/	開 ₁ 阿歌 合 ₂ 譚麻	開 ₂ 啞麻	開 ₂ 啞麻
曉母/h/			合 ₁ 火戈	合 ₂ 化麻	
匣母/ɦ/		開 ₁ 何歌 開 ₁ 河歌 開 ₁ 荷歌 合 ₁ 和戈 開 ₂ 蝦麻 開 ₂ 霞麻 合 ₂ 華麻	開 ₁ 荷歌 合 ₁ 禍戈 開 ₂ 下麻 開 ₂ 夏麻 開 ₂ 廈麻	開 ₁ 賀歌 合 ₁ 和戈 開 ₂ 暇麻 開 ₂ 下麻 開 ₂ 夏麻 合 ₂ 華麻	

この分析表で同じ枠に来たということは声母も互いに同じであり、声調も互いに同じということの意味する。同じ枠に来た2つの用字は同音同義、同音異義、異音同義、異音異義の4つのうちのどれか1つの関係に属する。同音同義字は多く同字または異体字と呼び、異音同義字は多音字（または破音字）と呼ぶ。これらと同音異義字は音韻対立を研究する時には除くのが安全である。従って異音異義字関係である用字が音韻対立の研究で革新的な資料となる。

同じ枠に来た用字において韻が互いに同じか異なるかをまず対比し、2つの用

字の韻母が互いに異なれば、この対が韻母の音韻対立の対となる。例えば、牙音見母/k/の行で平声の列に来た「開₁歌歌」と「開₂加麻」は韻母の音韻対立の対であるが、この2つは開合が互いに同じで等呼と韻母でのみ違いがある。ところで等呼は韻母に連動する時が多い。即ち、歌韻は常に1等であり、麻韻は基本的に2等である。麻韻には3等もあるが、これは麻韻に介音（わたり音）が入ったものである。言い換えれば、麻韻2等の韻腹と麻韻3等の韻腹は同じである。従って「開₁歌歌」と「開₂加麻」の音韻対立の対は事實は韻腹でのみ音価の違いが起る韻腹の最小対である。この例を通じて歌韻と麻韻の韻腹が互いに異なる母音でなければならぬことを知ることができる。対立項の「歌」と「加」は意味が互いに異なる単語であるが、韻腹の違いが意味分化の機能を担うからである。

声母を論ずる時は「音韻対立」という用語と「最小対立」という用語を区別する必要がなかった。しかし韻を論ずる時はこの2つを厳格に区別する必要がある。韻を構成する音韻論的要素である開合、等呼、韻腹の3つのうちどれか1つだけ違いがある時に最小対立という用語を用いる。他方音韻対立という用語は2つ以上の要素で違いがある時に用いる。例えば、分布分析表 (15)で喉音影母/ʔ/の平声の列に来た「開₁阿歌」と「合₂譚麻」は最小対ではなく、音韻対立の対である。

今、分布分析表 (15)で歌韻と戈韻の音韻論的対立関係を調べることにしよう。この2つの韻が同じ枠に来たことを列挙すれば、次の如くである。

(16) 歌韻と戈韻の音韻対立の対 (7対)

1. 泥母/n/の去声 - 開₁奈歌: 合₁懦戈(1対)
2. 心母/s/の平声 - 開₁娑歌: 合₁撒戈(1対)
3. 群母/g/の平声 - 開₁何歌, 開₁河歌, 開₁荷歌: 合₁和戈(3対)
4. 匣母/ɣ/の上声 - 開₁荷歌: 合₁禍戈(1対)
5. 匣母/ɣ/の去声 - 開₁賀歌: 合₁和戈(1対)

歌韻と戈韻の音韻対立の対は総7対である。ところでこの7対で歌韻は常に開口であり、戈韻は常に合口である。開口は現代音韻論のわたり音がないか、わたり音が /j/であることを指しており、合口は現代音韻論の後舌円唇わたり音 /w/（または前舌円唇わたり音 /q/）を指す。従ってこの対立の対の音価の違いは次の2つのうち1つだと記述できる。第1に、わたり音の有無や /j/と /w/の音価の違いによって用字の意味が区別される。第2に、歌韻と戈韻の韻腹が互いに異なり、意味が異なる。このように2つの記述が可能だから、(16)の対立の対は最小対ではなく、音韻対立の対なのである。

このような時にわれわれは「介音の違い優先の原則」を立てる。これは介音の

音価の違いが韻腹の音価の違いより音韻論的にもっと根本的かつ重要な違いという意味である。この原則によれば、歌韻と戈韻の韻腹は音価の違いがないと言ってもかまわない。韻腹で音価の違いがあると言っても、この違いは非弁別的である。実際に古代漢字音研究者の大部分が歌韻と戈韻の韻腹を等しく後舌低母音 /a/と推定している。ここに介音の違い優先の原則を適用すれば、歌韻と戈韻の音価は各々 /a/及び /wa/となる。

次に、歌韻と麻韻の音韻対立についての論議に移る。歌韻は常に1等であるが、麻韻には2等と3等の2種類がある。従って麻韻2等と3等が音韻論的に対立しているかをまず調べる必要がある。上の分布分析表 (15)で麻韻2等と3等が同じ枠に来たものを求めたところ、まさに1対が現れる。

(17) 麻韻2等と3等の音韻対立の対

船母/dz/の平声 - 開₂苴麻: 開₃蛇麻

音韻対立の対がただの1つしかないから、麻韻2等と麻韻3等の音韻対立を疑うことができる。対立項「苴」の音価を反芻してみると、案の定「苴」が多音字である。『廣韻』では「苴」の音価を「七余切, 子魚切, 鉏加切」の3つと記録してある。反切下字の「余」と「魚」は魚韻であり、「加」は麻韻である。ここで麻韻を捨て、魚韻を取れば (17)の音韻対立の対がなくなる。われわれはこの方法を採んで麻韻2等と麻韻3等の音韻対立を否定する。²⁶⁾

分布分析表 (15)で歌韻と麻韻が同じ枠に来たものを求めれば、次の32対が出て来る。歌韻1等と麻韻2等が音韻論的に対立することをここでただちに知りえるのである。

(18) 歌韻1等と麻韻2等の音韻対立の対 (32対)

1. 定母/d/の平声 - 開₁跏歌: 開₂茶麻(1対)
2. 清母/tʰ/の平声 - 開₁蹉歌: 開₂差麻(1対)
3. 見母/k/の平声 - 開₁柯歌, 開₁歌歌: 開₂加麻, 開₂嘉麻, 開₂家麻, 合₂瓜麻(8対)
4. 群母/g/の去声 - 開₁賀歌: 開₂暇麻, 開₂下麻, 開₂夏麻, 合₂華麻(4対)
5. 疑母/ŋ/の上声 - 開₁我歌: 開₂雅麻, 合₂瓦麻(2対)
6. 影母/?/の平声 - 開₁阿歌: 合₂譚麻(1対)
7. 精母/tʃ/の去声 - 開₁佐歌: 開₃借麻(1対)

上の対立の対で歌韻は常に1等開口である。他方麻韻では (18.7)の「開₃借麻」が

3等であるが、残りはすべて2等であり、開口ではなく、合口であるものが5字にもなる。麻韻3等と麻韻合口は歌韻1等と最小対立を成し得ないから、これらを音韻対立の論議の対象から除く方がよい。そうして歌韻1等開口の用字と麻韻2等開口の用字に限定すれば、音韻対立の対が32対から23対に減る。この23対は韻腹の最小対と言える。これらの歌韻と麻では等呼が韻母に連動するからである。

実質的最小対立が成立するので、歌韻と麻韻の韻腹は音価が互いに異ならなければならない。²⁷⁾ 先に歌韻の韻腹の音価を後舌低母音 /a/と推定してあるので、麻韻の韻腹は前舌低母音 /ɛ/と推定し得る。この時歌韻の音価に中舌低母音 /a/を配する代わりに麻韻の音価に /ɛ/を配してもよい。重要なのは果攝と假攝の韻母で韻腹が二元対立を成すという事実である。この2つの音価が何かという問題はそう重要ではない。母音体系全般を考慮して (19)の2つのうち1つを捉えばよい。

(19) 歌韻、麻韻の韻腹の2元対立

1. 麻韻/ɛ/ — /a/ 歌韻
2. 麻韻/ɛ/ — /a/ 歌韻

韻腹の最小対立を通して対立項に音価を配する時にわれわれは基本母音 /a(a), i, u, e, o/を優先的に配する。この5つの母音はいろいろの言語であまねく用いられる普遍的な母音だからである。基本母音だけで足りなければ、その時は2次母音の /ɛ, ɔ, ʌ, ə, i/等の母音を追加する。この方法によれば、(19.1)と(19.2)は音価の割り当てで違いが生ずる。

上の2元対立で何の根拠によって歌韻の韻腹の音価を後舌前母音と推定するのかを問うことができる。この時は漢語の各種の方言、朝鮮漢字音、日本漢字音、ヴェトナム漢字音の音価や韻図に現れる等呼の違いを活用して答えることができる。歌韻と戈韻は常に1等だから、必ず後舌または中舌母音を配さなければならない。2等の麻韻には中舌または前舌母音を配することとなる。麻韻は2等を基本とするが、3等も持つ。3等を持つという点では麻韻は相対的に歌韻より前舌母音側により近い。3等は常に介音を持つが、この介音が韻腹の母音を上引き上げ得るからである。²⁸⁾ この点を勘案して麻韻の韻腹を前舌前母音 /ɛ/、歌韻の韻腹を後舌低母音 /a/と推定する。

ところで蟹攝の佳韻2等を果攝と假攝に含める見解がある。これは佳韻が韻尾のない麻韻と混同される現実を重視したものである。²⁹⁾ この見解によって『世説新語』の佳韻2等を分析対象に含めて歌韻1等や麻韻2等と対比してみた。すると歌韻、麻韻、佳韻の韻腹が3元対立を成した。これはこの3つの韻の韻腹が互いに

異なっていということの意味する。従ってこの時は歌韻，麻韻，佳韻の韻腹に各々後舌低母音 /a/，前舌低母音 /ɛ/，中舌低母音 /a/を配することになる。

しかし佳韻2等に韻尾 /-i/があったと見る見解では強いて第3の中舌低母音 /a/を別に設定する必要がない。佳韻と麻韻が2つとも2等であるから，これらが韻腹に共通に前舌低母音 /ɛ/を配するが，佳韻は韻尾 /-i/のある /ɛi/であり，麻韻は韻尾のない /ɛ/と記述すればよい。この記述では佳韻と麻韻の音価が韻尾 /-i/の有無にすでに違いが出る。従って強いて中舌低母音 /a/を音素として設定しなくてもよいのである。

今まで『世説新語』に反映された前期中古漢語を対象として，後舌低母音と前舌低母音の音韻対立を記述したが，このほかにも分布分析表 (15)には多くの音韻史的情報が盛られている。第1に，麻韻2等と麻韻3等が相補対立を成す。5世紀前半の漢語ですでに麻韻2等と麻韻3等の分化が起ったといっても，この分化が新しい音韻対立関係に発展した状態ではなかった。第2に，戈韻には1等だけがあり，3等はなかった。これは5世紀前半までは戈韻3等がまだ分化していない状態だったことを語っている。

高句麗語表音字690(727)字を対象に上と同じ方法を適用して果攝と假攝を分析したところ，歌韻の韻腹と麻韻の韻腹が最小対立を成さない。これは後舌低母音と前舌低母音の音韻対立が高句麗語になかったことを意味する。従って高句麗語には低母音が1つしかなく，この低母音に当然 /a/を配する。

今度は他の例を挙げて母音の音韻対立を論ずることにする。今度は表音字のうち山攝と臻攝に属する韻を論議の対象にする。これらの攝は韻尾 /-n/や /-ŋ/を³⁰⁾持つという点で共通している。この韻尾の前に来た母音のうち音韻論的に対立する母音がいくつだったかを明らかにすれば，高句麗語の母音体系にたやすく近づくことができる。

山攝に属するものは寒韻1等(16/18字)，桓韻1等(12/13字)，先韻4等(15/16字)，仙韻3等 A, AB, B(25/28字)，元韻3等 C(9/10字)，山韻2等(4字)，刪韻2等(2字)等がある。臻攝には眞韻3等 A, AB, B(24字)，魂韻1等(21/24字)，文韻3等 C(17/18字)，諄韻3等 A, AB(9字)，欣韻3等 C(4/5字)，痕韻1等(3字)，臻韻3等 AB(1字)等がある。このうち高句麗滅亡以前に用いられたことのある表音字340字に限って分布分析表を作成すれば，次の如くである。

(20) 山攝字と臻攝字の分布分析表 (340字基準)

声母		声調			
		平声 ^L	上声 ^R	去声 ^D	入声 ^E
唇音	幫母/p/	3芬文			2八山 3弗文 3不文
	並母/b/			3下仙	3伐元 2拔 ^刪 1渤魂

	明母/m/	1蔓桓 3文文			1木桓 3密眞 3物文
舌音	端母/t/	合1敦魂	開4典先	開1旦寒 開3鎮眞	
	透母/tʰ/	開4天先			
	定母/d/			合3瑒仙	開1達寒
	泥母/n/	開3然仙 開3人眞		合3閏諄	
	來母/l/	開4零先 開3連仙	開3璉仙		開3列仙 開3栗眞
齒音	精母/ts/	開3眞眞 開4千先 開1殘寒 開4前先			開3折仙 開3拙仙 開4切先 合3絶仙 合1摔魂 合3述諄
	心母/s/	開4先先 開3鮮仙 開3仙仙 合1孫魂 開2山山	開1散寒 開3鮮仙 開2産山	開1散寒 開4先先 合1孫魂	開1薩寒 開3悉眞
	書母/sj/	開3蟬仙		合3順諄 開3慎眞	
	羊母/j/	開3延仙			
牙音	見母/k/	合4涓先 合3軍文		開1幹寒 合1貫桓 合1灌桓 開3建元	開1葛寒 合1骨魂
	群母/g/	合3群文 合3元元 合3原元	開3近欣	開3近欣	
喉音	曉母/h/	開1韓寒 合1桓桓 合1丸桓 開4賢先 合1渾魂	合1渾魂	開1漢寒 開3獻元	合1活桓 合1忽魂 開1紇痕
	影母/?/	開1安寒 合3雲文			開3謁元 開3乙眞 開3壹眞 合3鬱文

この分布分析表で同じ枠に来ることによって音韻論的に対立することを論議の対象とする。わずらわしさを避けてここでは音韻対立の対の具体的な用例を省略する。³¹⁾

山攝の1等には寒韻1等と桓韻1等がある。

(21) 寒韻と桓韻の音韻対立の対

- 見母/*k/の去声 - 開1幹寒: 合1灌桓, 合1貫桓
- 曉母/*h/の平声 - 開1韓寒: 合1丸桓, 合1桓桓

上の例で寒韻1等と桓韻1等は音韻論的に対立する。ところでこの対立の対では開口と合口の対立が韻母の対立より優先する。介音の違い優先の原則によっ

て寒韻1等と桓韻1等の韻腹は同じでもよい。既存の漢語中古音の研究結果に従ってこれらの寒韻1等の韻腹に中舌低母音 /a/を配する。桓韻1等は寒韻1等の合口韻であるから、/wa/の音価を持つ。

山攝の2等には山韻と刪韻がある。山韻2等は幫母/p/と心母/s/の後ろに分布し、刪韻2等は並母/b/の後ろに分布するから、この2つの韻母は音韻論的に弁別されない。これによりこの2つを1つにまとめて、山韻2等・刪韻2等とし得る。

(22) 寒韻1等と山韻2等，刪韻2等の音韻対立の対

心母/s/の上声 - 開₁散_寒: 開₂産_山

上で見られるように、山韻2等・刪韻2等が寒韻1等と同じ枠に来ることによって音韻論的に対立する。寒韻は常に1等であり、山韻・刪韻は常に2等であるから、この2つの等呼は韻腹に連動している。従って山韻2等・刪韻2等と寒韻1等の韻腹は互いに異ならなければならないから、山韻2等・刪韻2等の韻腹は /a/ではない。

山攝の3等には仙韻3等と元韻3等があり、4等には先韻4等がある。

(23) 仙韻3等と先韻4等の音韻対立の対 (6対)

1. 來母/l/の平声 - 開₃連_仙: 開₄零_先
2. 精母/tʃ/の入声 - 開₃折_仙, 開₃拙_仙, 合₃絶_仙: 開₄切_先
3. 心母/s/の平声 - 開₃鮮_仙, 開₃仙_仙: 開₄先_先

(23)は仙韻3等と先韻4等の音韻対立の対である。これらは韻母でも異なり、等呼でも異なるから、韻母の最小対ではない。さらに3等は介音を持つが(Karlgren 1954/92) 4等は介音を持たない(李榮1956)。従って介音の違い優先の原則によって仙韻3等と先韻4等の韻腹が互いに同じでもよい。

元韻3等は分布分析表 (20)で確認し得るように、仙韻3等や先韻4等とともに同じ枠に来ない。従って元韻3等の韻腹は仙韻3等や先韻4等の韻腹と同じでもよい。これによりこの3つの韻母の韻腹に同じ母音 /e/を配し得る。即ち、仙韻3等、元韻3等、先韻4等の韻腹の母音がすべて /e/であると推定し得る。(24)で先韻4等と寒韻1等が音韻論的に対立するが、これらの韻腹を各々 /e/と /a/と推定すれば、韻腹の最小対立を正確に維持し得る。

(24) 先韻4等と寒韻1等の音韻対立の対

1. 精母/tʃ/の平声 - 開₄千先, 開₄前先: 開₁殘寒
2. 心母/s/の去声 - 開₄先先: 開₁散寒

ところで以下の (25)で見られるように、先韻4等が山韻2等と同じ枠に来ることによって音韻論的に対立する。この2つの韻母は介音がないから、韻腹で音価が互いに異なると見なければならない。先韻4等の韻腹に /e/を配したから、山韻2等の韻腹は /e/ではない。

(25) 山韻2等と先韻4等の音韻対立の対

心母/s/の平声 - 開₂山山: 開₄先先

上の (22)で山韻2等と寒韻1等の音韻対立が成立するから、山韻2等の韻腹は /a/ではない。結論として、山韻2等の韻腹は /a/でもなく、/e/でもない。この韻腹の母音を第3の母音とすれば、この母音は中舌平唇母音 /a/である可能性が大きい。高句麗語では低母音が /a/ 1つだけであり、山韻2等の韻腹は平唇母音だからである。

では臻攝についての論議に移る。

臻攝の1等には魂韻と痕韻がある。痕韻1等に属するのは曉母/h/の入声の「開₁紇痕」1つだけである。ところで曉母/h/の入声の枠には山韻2等・刪韻2等が来ない。従ってこの2つを1つにまとめて痕韻1等・山韻2等・刪韻2等とすることができ、これらの韻腹に /a/を配することができる。

魂韻1等は常に合口である。魂韻1等はこの点で痕韻1等・山韻2等・刪韻2等と違いが生ずる。この点を強調して魂韻1等の韻腹に /o/を配し得る。痕韻1等の韻腹を /a/として魂韻1等の韻腹を /o/とすれば、以下の音韻対立の対を韻腹の母音の違いとして記述し得る。

(26) 痕韻1等と魂韻1等の音韻対立の対

曉母/h/の入声 - 開₁紇痕: 合₁忽魂

臻攝では2等に属する韻母がない。その代わり3等に属する韻母が多いのだが、そのうち文韻3等と諄韻3等は相補分布を成す。文韻3等は常に唇音や牙喉音の後ろに来るのに反して諄韻3等は常に舌歯音の後ろに来る。この2つは漢語上古音で同じ韻母に属し、前舌円唇介音 /*q/を持つ。この介音を高句麗語で受容する時に唇音と牙喉音の後ろでは /w/として受容し、舌歯音の後ろでは /j/として受

容する(이승재李丞宰2016b). 従って文韻3等は /wun, wut/と, 諄韻3等を /jun, jut/と推定し得る.

文韻3等や諄韻3等が魂韻1等とともに同じ枠に来たものとしては次の例がある.

(27) 魂韻1等と諄韻3等の音韻対立の対

精母/ʧ/の入声 - 介₁粹魂: 介₃述諄

上の音韻対立の対は韻母だけでなく等呼でも違いが生ずるから、韻母の最小対ではない。魂韻は1等であり、諄韻は3等だから、介音の違い優先の原則によれば、この2つの韻母の韻腹が同じでもよい。それにもかかわらずわれわれは魂韻1等の韻腹が文韻3等・諄韻3等の韻腹と異なっていたと見る。1等の魂韻の音価を /*on, *ot/と再構し、3等の諄韻の音価は /*jun, *jut/と推定する。3等は介音 /*j/を持ち、この介音の影響で高母音化が起ったとし得るからである。この高母音化は遇攝の虞韻3等でも確認されるから(이승재李丞宰2016b), 臻攝の諄韻3等と文韻3等でも同じ規則を適用する。

次に眞韻3等についての論議に移る。

(28) 眞韻3等と文韻3等の最小対

明母/m/の入声 - 3密眞: 3物文

(29) 眞韻3等と仙韻3等の最小対

1. 泥母/n/の平声 - 開₃人眞: 開₃然仙

2. 來母/l/の入声 - 開₃棠眞: 開₃列仙

(30) 眞韻3等と寒韻1等の音韻対立の対

1. 端母/t/の去声 - 開₃鎮眞: 開₁旦寒

2. 精母/ʧ/の平声 - 開₃眞眞: 開₁殘寒

3. 心母/s/の入声 - 開₃悉眞: 開₁薩寒

(28)と(29)の最小対を通じて眞韻3等の韻腹が /u/や /e/ではないことを知ることができる。(30)は最小対ではなく音韻対立の対ではあるが、眞韻3等の韻腹が

/a/ではないことを示している。また分布分析表 (20)で眞韻3等が魂韻1等と同じ枠に来た例がないが、眞韻3等の韻腹が 魂韻1等の韻腹 /o/と同じであると見る見解がない。総合すれば眞韻3等の韻腹は /u/, /o/, /e/, /a/ 等の母音ではない。

そうならば、眞韻3等の韻腹は /a/か /i/の2つのうちの1つであろう。先にわれわれは痕韻1等の韻腹に /ə/を当てているが、分布分析表 (20)で眞韻3等と痕韻1等が同じ枠に来た例がない。眞韻3等は欣韻3等とも同じ枠に来ない。これを重視すれば、眞韻3等、欣韻3等、痕韻1等の韻腹にあまねく /ə/ 母音を配してもよい。

しかし高句麗語の表音字では欣韻3等字が4字に過ぎず、痕韻1等字が3字にすぎない点を強調する必要がある。即ち眞韻3等が欣韻3等や痕韻1等とともに同じ枠に来ないのは偶然の空白であるとし得る。これによれば眞韻3等の韻腹に /i/を配し、欣韻3等や痕韻1等の韻腹には /ə/を配し得る。即ち眞韻3等の韻腹は /jin, jit/と推定し、欣韻3等の韻腹は /jən, jət/と推定する。このように推定して初めて後代の朝鮮中世漢字音ともよく合うだけでなく、/-n,-t/ 韻尾の前に /i/ 母音が来ないという特異性も解消し得るのである。

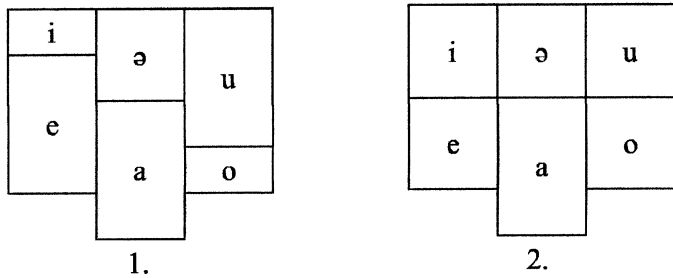
今までの論議を要約してみると、次の如くである。

(31) 山攝と臻攝の韻母の音価推定

1. 寒韻1等 = /an, at/
2. 桓韻1等 = /wan, wat/
3. 痕韻1等, 山韻2等, 刪韻2等 = /ən, ət/
4. 欣韻3等 = /jən, jət/
5. 仙韻3等, 先韻4等 = /jen, jet/
6. 元韻3等 = /wen, wet/
7. 魂韻1等 = /on, ot/
8. 文韻3等 = /wun~un, wut~ut/ (唇音, 牙喉音の後ろ)
9. 諄韻3等 = /jun, jut/ (舌齒音の後ろ)
10. 眞韻3等 = /jin, jit/

この音価の推定によれば、高句麗語の母音音素に /a, ə, e, o, u, i/の6個があったとし得る。今まで論議の対象を /-n,-t/ 韻尾のすぐ前に来得る母音に限定したが、すべての音韻論的環境をあまねく考慮しても、高句麗語の母音体系が 6母音体系だということがあまねく確認される。/-ø/ 韻尾の前では /a,e,i,o,u/の 5個が確認され、/-i/ 韻尾の前では /a, e, ə/の3個が確認され、/-ŋ, -k/ 韻尾の前では /a,e, o, u, ə/の5個が確認される。³²⁾ 従って高句麗語の母音体系が /a, ə, e, o, u, i/の6母音体系であることは分明である。

(32) 高句麗語の母音音声図と母音体系図



高句麗語の /e/ は中世朝鮮語の ‘ㅓ’ に対応し, /ə/ は ‘ㅡ’ だけでなく ‘ㅜ’ にも対応する. これを母音音声図と母音体系図として描けば, 上の如くである. (32.1)の母音音声図は6個の母音の分布状況だけを考慮したものである. 他方(32.2)はいろいろな母音がどの母音とよく合うかという点を勘案した母音体系図である. 高句麗語には母音調和がないが, /i, ə, u/の3母音が, /e, a, o/の3母音が各々互いによく合う.³³⁾ この傾向性を母音調和と命名することはできないが, 高句麗語の母音体系で [+high]が最も重要な音韻特徴であることを語っている.

5. 高句麗語, 百濟語, 前期中古漢語の子音体系の対比

上にプラハ学派の音韻対立理論を適用して古代漢字音を分析する方法を説明した. 相補分布と最小対という基礎的な音素設定方法だけでも漢字音の音韻体系の分析が可能である. 今度は分析結果を活用して, 高句麗語, 百濟語, 前期中古漢語の子音体系を互いに対比することにする.³⁴⁾

(33) 高句麗語子音体系

高句麗語子音体系				
	全清	次清	全濁	次濁
唇音	幫・非・滂・敷/*p/ 16+16+4+3=39		並・奉/*b/ 17+9=26	明・微/*m/ 42+11=53
舌音	端・知/*t/ 29+13=42	透・徹/*tʰ/ 13+1=14	定・澄/*d/ 23+13=36	泥・娘・日/*n/ 18+2+25 =45
				來/*l/ = 58

齒音	精・莊・章・清・ 昌・從・崇・船/*ts/ 23+4+22+15+7+19+5+ 4=99			
	心・生・邪/*s/ 51+5+16=72			
	書・常/*sj/ 19+16=35			
				羊/*j/=24
牙音	見・溪/*k/ 66+9=75		群・疑/*g/ 19+15=34	/*ŋ/ (韻尾にのみ)
喉音	影・云/*ʔ/ 43+14=57			
	曉・匣/*h/ 14+39=53			
762	472(62.0%)	14(1.8%)	96(12.6%)	180(23.6%)

(34) 百濟語子音体系³⁵⁾

百濟語子音体系					
方式 位置	全清	次清	全濁	不清 不濁	
唇音	幫・非・滂・敷/p/ 20+12+3+2 =37 5.2%		並・奉/b/ 16+10 =26 3.7%	明・微/m/ 32+10 =42 5.9%	105 14.9%
舌音	端・知/t/ 26+15 =41 5.8%	透・徹/tʰ/ 9+2 =11 1.6%	定・澄/d/ 27+7 =34 4.8%	泥・娘・日/n/ 12+3+18 =33 4.7%	119 16.8%
				來/l/ 46 =46 6.5%	46 6.5%
齒音 摩擦	心・生/s/ 34+13 =47 6.6%		邪/z/ 8 =8 1.1%		55 7.8%
	書/c/ 13 =13 1.8%		常/z/ 25 =25 3.5%		38 5.4%
齒音	精・莊/ts/	清・初・昌	從・崇・船		69

破擦	24+2 =26 3.7%	/tsh/ 11+3+4 =18 2.5%	/dz/ 17+3+5 =25 3.5%		9.8%
	章/tɕ/ 28 =28 4.0%			羊/j/ 29 =29 4.1%	57 8.1%
牙喉音	見・溪・曉/k/ 70+21+20=111 15.7%		群・匣/g/ 18+31 =49 6.9%	疑/ŋ/ 16 =16 2.3%	176 18.5%
	影/ʔ/ 25 =25 3.5%		云/f/ 17 =17 2.4%		42 5.9%
707	328 46.4%	29 4.1%	184 26.0%	166 23.5%	707 100%

(35) 『世説新語』の前期中古漢語体系

『世説新語』の前期中古漢語体系					
友式位置	全清	次清	全濁	不清不濁	
唇音	幫・非/p/ 69+30=99 4.2%	滂・敷/pʰ/ 23+20=43 1.8%	並・奉/b/ 61+44=105 4.5%	明・微/m/ 85+25=110 4.7%	357 15.3%
舌音	端・知/t/ 56+38=94 4.0%	透・徹/tʰ/ 39+13=52 2.2%	定・澄/d/ 87+58=145 6.2%	泥・娘・日/n/ 27+8+35=70 3.0%	361 15.5%
				來/l/ =143 6.1%	143 6.1%
齒音 摩擦	心/s/ =101 4.3%		邪/z/ =27 1.2%		128 5.5%
	生/ʃ/ =37 1.6%				37 1.6%
	書/ɕ/ =60 2.6%		常/ʒ/ =54 2.3%	羊/j/ =93 4.0%	207 8.9%
齒音 破擦	精/tɕ/ =70 3.0%	清・初/tɕʰ/ 42+14=56 2.4%	從/dz/ =65 2.8%		191 8.2%
	莊/tʂ/ =17 2.4%		崇・船/dʒ/ 17 2.4%		17 2.4%

	0.7%		18+15=33		0.7%
	章/ʈʂ/ =59 2.5%	昌/ʈʂʰ/ =25 1.1%	1.4%		117 5.0%
牙音	見/k/ =225 9.7%	溪/kʰ/ =87 3.7%	群/g/ =51 2.2%	疑/ŋ/ =81 3.5%	444 19.1%
喉音	影/?/ =95 4.1%				
	曉/h/ =65 2.8%		匣.云/h/ =116+52=168 7.2%		233 10.0%
2,330	922 39.6%	263 11.3%	648 27.8%	497 21.3%	2,330 100%

上の分析表はいろいろな声母がどの音素に束ねられるかを具体的に表して示したものである。黄笑山(1995)と이토 지유키伊藤智ゆき(이진호 Yi Jinho 訳)(2007: 91)によれば、声母が最大42個だが、俟母は高句麗語、百濟語、前期中古漢語にすべて用例がないから、声母目録から除いた。俟母を除いた41個の声母のうち変異音にすぎない声母を音素の資格を持つ声母に編入し、音素目録を決定すれば、前期中古漢語は29個、百濟語は22個、高句麗語は16個の子音を持つ。この数値は羊母/j/を持つことと見做す時の数値である（以下同）。

3つの言語の唇音で重唇音(両唇閉鎖音)と唇輕音(唇齒摩擦音)の区別がなく、舌音で舌頭音と舌上音の区別がない。3つの言語相互のこの一致を記述する時に、同じく『切韻』系韻書の音韻体系で分析したから、同じ結果が出て来るしかないと解釈し得る。しかしその他の子音目録では3つの言語が非常に大きく違いが生ずるから、この解釈は正しくない。後述するが、齒音や牙喉音で特に3つの言語の音素目録が大きく異なる。従って同じく『切韻』系韻書の音韻体系で分析するとしても、用字の母集団が互いに異なれば、音素目録も異なると記述しなければならない。

われわれの研究方法によれば、用字の母集団が大きくなればなるほど最小対は増え、小さければ小さいほど最小対は減る。この命題は明らかに真実である。しかし最小対が無限大に増えるというのではない。これを確認するために『世説新語』の2,212(2,486)字のうち使用頻度が高い1,112字に限り同じ方法で音素を設定してみた。³⁶⁾すると2,212(2,486)字の分析結果と同じく1,112字でも前期中古漢語の子音音素が29個だった。これは分析対象の量的大きさに比例して音素の数が決定されるのではないことを語っている。言い換えれば、母集団が大きくなるにつれて最小対が増え

続けたとしても、それは剰余的增加に過ぎないのである。

百濟語と高句麗語の表音字は2つとも690字余りであるから、量的差異がほとんどないのに、音素分析の結果として登録された百濟語の子音は22個であり、高句麗語の子音は16個である。6個の違いは非常に大きな違いである。従って分析対象の量的大きさが音素の数字を決定する基準であると言うことはできない。むしろ重要なのは分析対象の質的違いである。質的違いとは言い換えれば、音韻論的対立関係での違いを指す。以下(36)の齒音で見られるように、百濟語の破擦音と摩擦音には有声/無声の対立があるが、高句麗語の破擦音と摩擦音には有声/無声の対立がない。これは音韻対立の有無によって音素の数が多くもなれば少なくもなることを語っているのである。

そうだと言って母集団の量的大きさを完全に無視してはならない。『世説新語』の対話文で6回以上用いられた656字に限って³⁷⁾ われわれの研究方法を適用すれば、捲舌音の莊母/tʂ/と硬口蓋音の昌母/tʂʰ/が音素目録から除かれる。即ち656字のセットでは2つの音素が減って子音音素が27個となる。このことは音韻体系全般を漏れなく記述しようとするならば、一定量以上に母集団が確保されなければならないことを意味する。

何字以上の漢字を確保すれば音素が洩れないかは経験的に求めるしかない。前期中期漢語の音韻体系を『世説新語』の対話文で求めるならば、母集団の量的大きさが少なくとも1,200字以上にならなければならない。Karlgren (1957)が *Grammata Serica Recensa* で分析対象とした漢字がたまたま1,260字だった(李敦柱 2003: 468)。

百濟語694(707)字と高句麗語690(727)字は滅亡以前の表音字に限定すれば、340字前後に減る。そうならば分析対象が少なすぎるのではないか? この疑問によれば、百濟語の子音22個と高句麗語の子音16個は最小値に過ぎないから、実際には子音の数がもっと増える可能性がある。

しかしわれわれはこの可能性を信じない。百濟語と高句麗語の表音字は白国語を表記するために厳格に選定されている。従ってこれらの表音字は構造主義言語学で強調する「典型性の要件」を備えていると言い得る。これとは異なり『世説新語』の対話文に現れる2,212(2,486)字はこのような選別過程を経ていない。音韻対立の関係を考慮して厳選された690字は無作為に差し出された2,212(2,486)字より音韻対立に関する限りもっと多くの情報を盛り込み得る。³⁸⁾ この解釈によって百濟語と高句麗語の子音音素が実際にも各々22個と16個だったと見做す。3つの言語の子音が体系的に対応するからである。

3つの言語の子音音素相互の対応関係を構造方言学の *Diasystem* を応用して表せば、以下の(36)の如くである。

この対比表で3つの言語の子音音素が完全に一致するのは舌音しかない。他方、

相互に甚だしく違いが生ずるのが歯音と牙喉音である。代表的なのが匣母と云母(または喻母3等)の所属である。前期中古漢語では、云母が常に3等であるのに反して、匣母は常に1,2,4等である。即ち云母と匣母が相補分布を成すから、この2つの韻母が1つの音素匣母・云母/h/となるのである。

(36) 3言語の子音音素対応表

声母		言語	前期中古漢語	百濟語	声母		言語	前期中古漢語	高句麗語
唇音	幫・非		/p/	/p/	唇音	幫・非	/p/	/p/	
	滂・敷		/p ^h /			/p ^h /			
	並・奉		/b/	/b/					
	明・微		/m/	/m/					
舌音	端・知		/t/	/t/	舌音	端・知	/t/	/t/	
	透・徹		/th/	/th/		透・徹	/th/	/th/	
	定・澄		/d/	/d/		定・澄	/d/	/d/	
	泥・娘・日		/n/	/n/		泥・娘・日	/n/	/n/	
	來		/l/	/l/		來	/l/	/l/	
齒音摩擦	心		/s/	/s/	齒音	心	/s/	/s/	
	生		/ʃ/			生	/ʃ/		
	書		/c/			書	/c/		
	邪		/z/			邪	/z/		
	常		/ʒ/			常	/ʒ/		
齒音破擦	精		/ts/	/ts/	齒音	精	/ts/	/ts/	
	莊		/tʃ/			莊	/tʃ/		
	章		/tɕ/			章	/tɕ/		
	清・初		/tʰ/			清・初	/tʰ/		
	昌		/tɕ ^h /			昌	/tɕ ^h /		
	從		/dʒ/			從	/dʒ/		
	崇・船		/dʒ/			崇・船	/dʒ/		
羊		/j/	/j/	羊	/j/	/j/			
牙喉音	見		/k/	/k/	牙音	見	/k/	/k/	
	溪		/k ^h /			溪	/k ^h /		
	曉		/h/			群	/g/		/g/

	疑	/ŋ/	/ŋ/
	群	/g/	/g/
	匣	/ɦ/	
	云		/ɦ/
	影	/ʔ/	/ʔ/
5	41	29	22

	疑	/ŋ/	/ŋ/ ³⁹⁾
喉 音	曉	/h/	/h/
	匣	/ɦ/	
	云		/ʔ/
	影	/ʔ/	
5	41	29	16

百濟語では匣母が群母と相補分布を成し、曉母も見母と相補分布を成す。従ってこの2つを並行的に処理しなければならない。曉母を見母に編入して見母・曉母/k/となるから、匣母も群母に編入して⁴⁰⁾1つの音素群母・匣母/g/となる。前期中古漢語と百濟語では摩擦音にも有声/無声の対立があるから、匣母や云母が有声子音に分類される。この有声子音云母/ɦ/が無声子音影母/ʔ/と音韻論的に対立する。

他方、高句麗語の破擦音と摩擦音では有声/無声の対立がない。従って破擦音の従母[ɟ]が精母/tʃ/に編入され、摩擦音の邪母[z]が心母/s/に編入される。後に匣母は無声音の曉母/h/に編入され、云母はやはり無声音の影母/ʔ/に編入される。高句麗語では実際にも匣母と曉母が相補分布を成して云母と影母も相補分布であるから、このようにまとめ得る。

特に匣母と云母の音韻論的対立の関係が3つの言語で各々異なる。そうして3つの言語を1つの音素対応表として作成しようとするれば、単一の声母を2個所に分けて配列しなければならない矛盾が生ずる。従って上の(36)におけるように、前期中古漢語と百濟語の対応表をまず提示してから、前期中古漢語と高句麗語の対応表を別に提示するしかない。

漢語音韻史と関連して、칼그렌Karlgrén(崔玲愛譯)(1985: 42)は唐代になって重唇音と軽唇音が区別されたと見ている。また칼그렌Karlgrén(崔玲愛譯)(1985: 33)は宋代の韻図で端組(舌頭音, 齒莖音)と知組(舌上音)を区別したのを見て漢語中古音で舌頭音と舌上音の区別があるとした。しかし5世紀の『世説新語』では重唇音と軽唇音の区別だけでなく、舌頭音と舌上音の区別もない。

齒音の莊組が独自に分化したのかどうかは漢語音韻史で非常に重要である。齒音破擦音には精組(齒莖音), 莊組(捲舌音), 章組(硬口蓋音)の3つがあるが、『世説新語』の漢語ではこれらの音韻対立の関係が以下の(37)の如くである。

(37) 『世説新語』 齒音破擦音の音韻対立

位置	方式	全清	次清	全濁
齒音	精組	精/tʃ/	清・初/tʃ ^h /	從/ɟ/

破擦	莊組	莊/ts/		船・崇/dz/
	章組	章/tc/	昌/tc ^h /	

全清(即ち無声無気音)では莊組が5世紀前半にすでに分離して莊母/ts/が独自の音素として座を占めた。他方次清(即ち有気音)と全濁(即ち有声音)ではまだ莊組(捲舌音)の分離が起っていなかった。次清の莊組の初母は精組の清母/tc^h/と相補分布を成すから、この2つの声母が合わさって1つの音素の清母・初母/tc^h/となる。他方全濁で莊組の崇母が章組の船母/dz/と相補分布を成す。従って全濁では、次清においてとは異なり、莊組が章組と1つにまとめられて音素船母・崇母/dz/となる。簡単に言えば、有気音では捲舌音が齒茎音と1つにまとめられるのに反して、有声音では捲舌音が硬口蓋音と1つにまとめられる。これを図示したものが(37)である。

漢語上古音では莊組(捲舌音)が精組(齒茎音)と合していたか、互いに近かった(王力(李鍾振, 李鴻鎮譯) 1980: 244)。ところでKarlgren(1957)は宋代の韻図をそのまま信じ、莊組を捲舌音とし、章組を硬口蓋音とした。これを魏晉南北朝時代の対訳資料で証明したのが水谷眞成(1967)である。即ち前期中古音で齒音破擦音の全清、次清、全濁ですべて齒頭音1等の精組(齒茎音)、正齒音2等の莊組(捲舌音, 照二系)、正齒音3等の章組(硬口蓋音, 照三系)が互いに区別されているとした。これは各々われわれの齒茎音 /ts/, 捲舌音 /tʂ/, 硬口蓋音 /tɕ/に該当する。同じく齒音摩擦音の全清でも齒茎音心母/s/, 捲舌音生母/ʂ/, 硬口蓋音書母/c/の音韻対立があったと見た。これが今までの通説である。

ところで(37)に整理したように5世紀前半の『世説新語』では捲舌音(莊組, 正齒音2等)の分化過程が全清, 次清, 全濁で各々異なる。『世説新語』では全清でのみ捲舌音の分化が起り、次清と全濁では捲舌音の分化がまだ起きていない。次清では捲舌音が齒茎音とまとめられ、全濁では硬口蓋音とまとめられる。既存の研究ではこのような記述を求めることができない。韻図と対訳資料を中心に研究するうちは、このように微細な違いを見落とすしかない。他方微細でありながらも言語学的に有意な違いまで指摘し得るという点でわれわれの研究方法の方が既存の研究方法より事実は優位にある。

次に (33~35)の分布分析表で3つの言語の全清, 次清, 全濁, 不清不濁が占める占有比率を求めることにする。

(38) 高句麗語, 百濟語, 前期中古漢語の子音調音方式占有率 (%)

言語 \ 方式	全清	次清	全濁	不清不濁
高句麗語	62.0	1.8	12.6	23.6

百濟語	46.4	4.1	26.0	23.5
前期中古漢語	39.6	11.3	27.8	21.3
平均	47.0	6.7	22.8	23.5

上の (38)で見る事ができるように, 前期中古漢語では「全清(無声無気音, 39.6%)>全濁(有声無気音, 27.8%)>不清不濁(次濁, その他の子音, 21.3%)>次清(無声有気音, 11.3%)」の順序で占有比率が高い. このことは漢語上古音の音韻対立に有声/無声の対立がはっきりとあったことを意味する. 漢語上古音で音韻変化が起こり, この対立に有気/無気の対立が加わる. その後にも有気音が増える変化が引き続き起こり, 遂に有声/無声の対立が有気/無気の対立に変わる事となる. これを立証するのが濁音の清音化である.⁴¹⁾ 濁音(有声音)即ち全濁のうち声調が平声なら無声有気音に変わり, 仄声なら無声無気音に変わった.⁴²⁾ 現代北京語ではこの変化がすでに完了し, 有気/無気の対立だけが存在する.

百濟語では調音方式の占有比率が「全清(46.4%)>全濁(26.0%)>不清不濁(23.5%)>次清(4.1%)」の順序であり, 高句麗語では「全清(62.0%)>不清不濁(23.6%)>全濁(12.6%)>次清(1.8%)」の順序である. 百濟語の全濁占有率26.0%は前期中古漢語の27.8%とともに占有比率が高いから, 百濟語でも有声子音があったと(이승재李承宰2013)することができる. 他方高句麗語では全濁(有声無気音)の占有比率(12.6%)が顕著に落ちる. 高句麗語では閉鎖音にのみ有声/無声の対立があるからである.

(39) 高句麗語, 百濟語の有声/無声の対立

	閉鎖音			破擦音			摩擦音			
前期中古漢語	/p/	/t/	/k/	/ts/	/tʃ/	/tɕ/	/s/	/ʃ/	/ç/	/h/
	/b/	/d/	/g/	/dʒ/		/dʒ/	/z/		/z/	
百濟語	/p/	/t/	/k/	/ts/		/tɕ/	/s/		/ç/	/h/
	/b/	/d/	/g/	/dʒ/			/z/		/z/	
高句麗語	/p/	/t/	/k/	/ts/			/s/			/h/
	/b/	/d/	/g/							

百濟語と前期中古漢語ではすべての子音で有声/無声の対立が成立するが, 高句麗語では閉鎖音でのみこの対立が成立する. この点で百濟語は前期中古漢語と近いのに比して, 高句麗語とは大きく違いが生ずる. これを分かりやすく表で

表せば、上の (39)の如くである。そうだとって高句麗語の全濁占有率12.6%を無視し得ない。この程度の比率なら、高句麗語にも有声子音があったとし得る。

有気子音では百濟語と高句麗語の占有比率が各々4.1%と1.8%だから、非常に低い。実際に高句麗語では有気音が透母・徹母/tʰ/だけであり、百濟語ではここに清母・初母・昌母/tʰ/が追加される。⁴³⁾ 他方前期中古漢語はその比率が11.3%に達し、有気子音に滂母・敷母/pʰ/, 透母・徹母/tʰ/, 清母・初母/tʰ/, 昌母/tʰ/, 溪母/kʰ/の5個がある。この違いを重視すれば、高句麗語と百濟語を1つにまとめることができる。この2つの言語では有気音がたった今ちょうど独自の音素として座を占め始めたばかりだと言える。他方前期中古漢語ではこの無声有気音の分化が早くから(恐らく漢代上古音ですでに)起きたと言える。

以下の (40)は子音の調音位置によって3つの言語がどのように違いが生ずるかを示すものである。調音位置では3つの言語がほとんど違いがないように見える。

(40)高句麗語, 百濟語, 前期中古漢語の子音調音位置占有率 (%)

		高句麗語		百濟語		前期中古漢語		平均	
唇音		15.5		14.9		15.3		15.2	
舌音		25.6		23.3		21.6		23.5	
歯音	摩擦	27.0	14.0	26.9	13.2	25.9	12.0	26.6	13.1
	破擦		13.0		13.7		13.9		13.5
牙喉音	牙音	28.7	14.3	24.4	18.5	33.2	26.3	28.8	19.7
	喉音		14.4		5.9		6.9		9.1

(羊母/j/の占有率は除いた)

ところで牙喉音でとても興味深い違いが1つ発見される。高句麗語と前期中古漢語では牙音と喉音を区別するのがとても容易である。その結果がはっきりしていて、見母・溪母・群母・疑母を牙音とし、曉母・匣母・影母・云母を喉音とし得る。従って高句麗語と前期中古漢語では牙音と喉音の調音位置が互いに異なっていたとしなければならない。しかし百濟語ではこの区別が不可能である。喉音の曉母が牙音の見母・溪母に編入されて音素 /k/となり、喉音の匣母が牙音の群母に編入されて音素 /g/となる。このような状況では牙音と喉音の調音位置を区別することはできないから、2つの調音位置を牙喉音1つに合しなければならない。

高句麗語では牙音と喉音の調音位置が区別されるが、百濟語ではこの区別がない。ところで興味深いことには歯音では正反対である。高句麗語では歯音の調

音位置に歯茎音1つしかないが、百濟語は歯茎音と硬口蓋音の2つに分かれる。そうして結果としては高句麗語と百濟語で調音位置の区別が5個ずつで、同じになる。高句麗語の調音位置が唇音, 舌音, 齒音, 牙音, 喉音の5種類ならば, 百濟語は唇音, 舌音, 齒茎音, 硬口蓋音, 牙喉音の5種類である。

最後に, 高句麗語や百濟語の子音体系を後代の方言現象と結びつけて論ずることとする。

高句麗語では書母・常母[ɕ]が心母・邪母/s/と音韻論的に対立するようだが, 書母・常母が常に口蓋音化の環境である /i/や /j/の前にだけ来る。この点を強調すれば, 書母・常母[ɕ]は独自の音素ではなく, 心母・邪母/s/の変異音だとし得る。また高句麗語では硬口蓋音の章母[tɕ]が独自の音素ではなく, 精母・莊母に編入されて1つの音素の精母・莊母・章母/ts/にまとめられる。上の2種類を1つに総合すれば, 高句麗語の齒音には歯茎音だけがあり, 捲舌音と硬口蓋音がなかったという結論が出て来る。

現代の西北方言*と一部の東北方言**は /ɕj, ɕc/ 等の子音が硬口蓋音ではなく歯茎音で発音される(李基文1972/77, 崔明玉1985, 金英培1997: 204~5, 郭忠求1994: 319~24)。中世朝鮮語の /ɕj, ɕc/も硬口蓋音ではなく, 歯茎音だった(李基文1972/77)。これは高句麗語の歯茎音 /ts/をそのまま受け継いだものだと言える。この推論が可能だという点でわれわれの研究結果が説得力を持つのである。

【訳者注】*主として咸鏡道Hamgyeongdoハムギョンドの方言。現在の両江道Ryang'gangdoリヤングンド及び咸鏡南北道。

**主として平安道Pyeongandoピョンアンドの方言。現在の慈江道Jagangdoチャガンド及び平安南北道。

また中世朝鮮語では 'Δz'が独自の音素だったが, 現代のいろいろの方言のうち 'Δz'が存在しなかったことを証明するのが最も難しい方言が西北方言である。⁴⁴⁾ 一部の東北方言にはいまだに 'Δs' 不規則動詞がない(郭忠求2015)。このように北部方言で 'Δz'の存在を立証しにくいことは高句麗語の音韻体系をそのまま受け継いだことに始まることではなからうか? 高句麗語では邪母[z]が独自の音素ではなく 心母/s/の変異音だったために, このような推論が可能である。

他方 (36)の対応関係で百濟語の無声摩擦音 [h]が音素ではない代わりに有聲摩擦音 /ɦ/が音素だという事実が人目を引く。現在の西南方言*では '밥허고babhago[pap^hago] <ご飯と>, 못한다moshanda[mot^handa] <できない>, 만족했다manjoghaessda[mandzok^het'a] <満足した>' 等有氣音化が起らない代わりに有聲音化が起り, 各々[pabəgo, modanda, mandzoget'a]等と発音される。この方言では 'ɕh'が有氣音化の同化主ではなく, 有聲音化の同化主だから, この 'ɕh'が有氣音 [h]ではなく有聲音 /ɦ/だという仮定が成立する。有聲音の前では /p, t, k/ 等が [b, d, g] 等に有聲音化し得るからである。まさにこの有聲音 /ɦ/が

百濟語の云母/ɦ/に起源を置いたようであり、とても興味深い。

【訳者注】*主として全羅道Jeonradoチョルラドの方言。

論議を終えるにあたり、一言付け加えておく。宋代の韻図を研究対象にすれば、Karlgrénがそうであったように、音声学的再構に執着することとなる。韻図は宋代の学者たちの漢字音分析理論であるだけであって、自然言語それ自体ではない。他方われわれは高句麗語、百濟語、前期中古漢語等の自然言語を音韻論的に再構するのに研究目標を置く。自然言語を研究対象とすれば、現実の口語で用いられた用字や表音字を網羅して資料をまずそろえることとなり、これを分析の対象とする。分析する時は宋代の韻図を積極的に活用するが、韻図の声母(または韻母)が音韻論的に対立するかを実証的に資料を通じて検証する。この過程で『世説新語』の莊組が全清、次清、全濁で各々異なる行動を見せる事実を発見し、匣母と云母の所属が言語ごとに異なり得るという事実を発見した。他方韻図対象の研究では現実の口語の資料を集める過程と史料を通じた実証的検証過程省略される。従ってわれわれが発見した現象を韻図中心の研究では求めることができない。この違いはとても大きい。

6. 結論

今までプラハ学派の音韻対立理論を古代漢字音の分析に適用した。相補分布と最小対の有無を中心に高句麗語と百濟語の子音体系を設定すれば、/j/を含めて高句麗語は16個の子音が、百濟語には22個の子音が音素として登録される。この2つを対比してみると、高句麗語では有声/無声の対立が閉鎖音でのみ成立するが、百濟語ではすべての子音で有声/無声の対立が成立する。これは言語学的に有意義な違いである。

何より重要なのは高句麗語と百濟語の子音体系が後代の方言にその痕跡を残したという事実である。高句麗語では歯茎音(精組)と硬口蓋音(章組)の音韻対立がない。従って歯茎音 /ts/だけが子音目録に登録されるのだが、これが中世朝鮮語と現代の西北方言にそのまま引き継がれる。高句麗語では有声摩擦音がないから、/z/が子音目録から除かれるのだが、現代の西北方言では実際に‘Δz’の存在を確認することがとても難しい。他方百濟語では /z/が子音音素だったし、‘Δz’の痕跡を現代の西南方言で直ちに求めることができる。

百濟語では [h]が独自の音素ではなかった。現代の西南方言では‘뭇한다moshanda[mot^handa]〈できない〉’等では有気音化が起るのではなく、有声音化が起るのである。この方言の‘ㅎ’が百濟語の有声音 /ɦ/に起源を置いているとすれば、これをとてもたやすく記述し得る。

高句麗語の表音字を対象としてその韻母を分析すると、高句麗語の母音体系は6母音体系だった。中世朝鮮語の母音体系とほとんど同じで、中声朝鮮語の‘*ㅑ*’と‘*ㅓ*’が高句麗語の /a/ に対応するという点だけ違いが生ずる。

われわれの研究結果によれば、5世紀前半の『世説新語』に反映された前期中古漢語では後舌低母音と前舌低母音の音韻対立が成立する。または重唇音と輕唇音の区別がなく、舌頭音と舌上音の区別がやはりない。特に莊組(捲舌音)の /tʂ/ と /ʃ/ が音素の資格を持つ。このような既存の前期中古音の研究結果と一致するから、われわれの研究方法に誤った点がないことを証明している。

ところで莊組(捲舌音)の初母 [tʂ^h] が齒茎音の清母 /tʂ^h/ に編入されるが、やはり莊組の崇母 [dʒ] は硬口蓋音の船母 /dʒ/ に編入される。この微細な違いは既存の漢語中古音研究者たちがまったく言及したことがない。われわれの研究方法はこのように微細な違いまで探り出し得るから、歩を進めたものである。

一方、喉音の匣母はやはり喉音の云母と相補対立でありつつ同時に牙音の群母とも相補分布を成す。前期中古漢語では匣母と云母を1つに合して音素匣母・云母 /h/ とする方が正しい。これとは異なり百濟語では匣母が群母と合して音素群母・匣母 /g/ となる。これは曉母が見母に編入され、見母・曉母 /k/ となることと平行的である。高句麗語では匣母が曉母に編入されて曉母・匣母 /h/ となり、云母が影母に編入されて影母・云母 /ʔ/ となる。高句麗語の摩擦音では有声/無声の対立がないので、このように編入される。

われわれは匣母と云母の分布を中心に3つの言語で成立する音韻論的対立関係を正確に記述することができる。言語により匣母と云母を分類する方式が異なるのだが、われわれの研究方法はこれを正確に把握することができる。この研究の方法論によれば、漢字音の研究資料を押韻字や同じ声符字に限定しなくてもよい。すべてのテキストの漢字をあまねく分析対象とし得る。ただし現実の口語で用いられたことを確認し得なければならない。われわれは『世説新語』の対話文に現れる2,212(2,486)字を通してこれを証明した。既存の研究ではこれを研究対象としたことがないが、その原因は研究の方法論の不在にある。われわれのように相補分布と最小対の有無を中心に漢字音を分析すれば、『世説新語』の対話文に現れる2,212(2,486)字も音韻論研究の資料としてまったく遜色がない。

上のいろいろな事実はわれわれの研究方法が經驗的妥当性を備えていることを語っている。ただしわれわれの研究方法を適用する時に基本的に備えなければならない条件がある。

第1は魏晉南北朝から北宋までの言語資料にのみ適用するという条件である。この時期は『切韻』系韻書の音声体系を言い換えれば漢語中古音の音声体系を適用するが、それ以前や以後の時期にはこの音声体系を適用しない。勿論、漢語上古音の音声体系が確定されるならば、これを基盤として上古音の時期の多様な

資料を分析対象とすることができる。

第2は現実の口語で用いられた漢字であることを立証できなければならないという条件である。漢字は意味を中心に用いる表意文字であるから、文語には当時の現実の口語で用いない漢字も多数含むようになる。これは現実漢字音の音韻対立を研究する時にとっても重要な障害物になる。従って『世説新語』の対話文のように現実の口語で実際に用いられたことを証明できなければならない。

第3は全数調査を通して一定量以上の母集団を確保しなければならないという条件である。『世説新語』の656字の集合で見たように、母集団の大きさが減れば、一部の音韻対立が抜け落ちる。このような抜け落ちは全体の音韻体系を歪曲する結果をもたらす。従ってわれわれは分析対象が少なくとも1,200字以上にならなければならないことを経験的に提示した。これは自然発話で用いられた用字を無作為に抽出した時の数値であるから、表音字として用いるために厳選した状況ではその数値がもっと小さくなる。資料の典型性が充足された状況では500字以上なら十分であると考えますが、これは経験的にもう少し確認する必要がある。

上の3つの条件をあまねく充足する資料にはどんなものがあるだろうか？

まず浮かび上がるのは杜甫(712~770年)と李白(701~762年)の詩である。杜甫の詩1,400余首と李白の詩1,000余首が伝わるが、押韻字が500字以上ならば、これを資料として8世紀中葉の漢語音韻体系を再構し得る。この2人の詩人は出身地と活動した地理的背景が互いに異なるから、音韻体系の分析結果が互いに異なり得る。その違いは方言のちがいと解釈すればよい。

漢訳仏典にも少なからぬ量の対話文が現れる。5世紀初に鳩摩羅什が漢訳した『法華経』や佛駄跋陀羅が漢訳した『華嚴経』等で対話文を抽出した後で、ここで各々1,200字程度を確保し得るが、5世紀初葉の漢語音韻体系を再構し得る。この『法華経』と『華嚴経』の用字で相互に違いが生ずれば、それもよい研究対象である。

日本の『古事記』と『日本書紀』に少なからぬ量の歌謡が載せられている。ここで表音字(音假名)として用いられたものを500字以上確保し得るならば、これを資料として7世紀末葉から8世紀初葉にわたる時期の日本語の音韻体系を再構し得る。8世紀後半の『萬葉集』には4千余首の歌謡が載せられている。われわれの研究方法に従って、分析してみたいものが一二ではない。

【注】

- * この論文は韓国言語学会創立40周年記念学術大会（ソウル大，2016年1月15日）で「古代漢字音の音韻対立研究」という題目で発表した原稿を大幅に修正

補完したものである。

- 1) ここで「古代漢字音」というのは中国周辺国で受容した漢字音だけでなく中国の古代の時期の漢字音も含まれる。中国では「漢字音」という術語の替りに「字音」*という。

【訳者注】*日本でもまた「字音」という。

- 2) 漢語史の時代区分は学者ごとに異なる。王力(1957: 43)では五胡十六國時代までを上古期、南宋前半までを中古期という。
- 3) 漢字は意味（即ち字意）と音〔オン〕（即ち字音）を持つが、意味を捨て、音だけを持った文字を表音字という。反対に、意味だけを持ち、音を捨てた文字を表訓字（または表意字）という。
- 4) 表音字をバラで数えれば694字である。ところで1つの漢字がいろいろの音価を持つ時があり、この中で声母が多音であるものを別途に追加して計算すれば707の音価となる。これを694(707)字と表記する。高句麗語や前期中古語もこれと同じ。
- 5) これについての全般的な研究は後日を期し、ここで子音体系についての論議に限定する。新羅語についての研究も後日に延ばす。
- 6) 前期中古音の唇軽音と舌上音が代表的な例となる。
- 7) これとは異なりMartin (1953)が音素単位で漢字音を研究しなければならないと主張したが、惜しいことには大きな反応は得られなかった。
- 8) 現代言語学の用語では齒茎音である。
- 9) この方法とは異なり、‘ㄱg’と ‘ㄱgg’を各々独自の音素として設定しなければならないと主張するかも知れない。しかしそれは朝鮮語固有における音韻対立を参考としたものであって、朝鮮漢字音を基準としたものではない。われわれは漢字音研究に目標を置くのだから、固有語の音韻対立は参考としない。
- 10) ここに漢語拼音の ‘yu’ 即ち前舌円唇わたり音 /y/を含め得る。この /y/も前舌性を持つから口蓋音化の同化主となる。
- 11) この分化の過程で中間段階の音価である [n̄z]を経たと言ってもかまわない。
- 12) 後期中古音では口蓋音化した鼻子音にさらに脱鼻音化が興るのだが、日本の吳音の漢音が代表的な証拠となる。(2)の微母の列に来た大部分の漢字を日本吳音では /m/として受容したが、漢音では /b/として受容した。これを強調すれば、脱鼻音化が前期中古音では起らず、後期中古音で起こったと見なければならぬ。日本の吳音は前期中古音を受容したものであり、漢音は後期中古音を受容したものである。
- 13) この音価をイト 지유키Ito Jiyuki伊藤智ゆき (이진호Yi Jinhoイ・ジンホ訳) (2011)が現代的感覚に合わせて整理しているので、われわれはこれに拠った。
- 14) 漢語中古音では声調の音価即ち調値（声値）を知ることができない。従って

平・上・去・入は英訳の Level・Rising・Departing・Enteringの頭音によって各々 (˩)・(˨)・(˩)・(˨)と表記する。

- 15) 칼그렌Karlgrén(崔玲愛譯)(1985: 30~1)のこの学説は揺るがない。3等をさらに A, B, AB, C 等に細分するが、この論文ではこれと関連する内容がないので、3等を細分しないことにする。
- 16) この 2 つの韻の音価が韻尾の有無によって違いが生ずると見る見解も有る(後出)。
- 17) このように等が韻母に従属する時が多い。開合も韻母に連動して自動的に決定される時がある。
- 18) よく組織され、訓練された精鋭軍700人が農業に従事して突然選出された農民軍2,212人にやっつけられることがあることに例えることができる。
- 19) この分析表では紙面を節約するために同じ列に配列したが、実際はこの2つを分けて配列しなければならない。
- 20) 「沙伴王」は234年に即位したが、すぐに廃位となったものと伝える。「沙伴」と表記することにする。父は仇首王である。『三國史記』古爾王即位条で仇首王が死亡するとすぐ彼の長子の沙伴王が王位を継承した(『한국민족문화대백과사전[韓國民族文化大百科事典]』の「沙伴王」の項目から引用)。
- 21) 出典は次のように略号で示す。

馬=『三国志』に記録された馬韓国名、中=百濟滅亡以前に編纂された中国史書、木=百濟木簡、憬=憬興*の半切字、日=8~9世紀に編纂された日本史書、地=『三國史記』地理志、唐=百濟滅亡以後に編纂された中国史書、史=『三國史記』、遺=『三國遺事』。

【訳者注】憬興(きょうごう)はウィキペディアには「新羅の人で法相宗の僧である。7世紀後半の人だとされるが、詳細は不明。」とある。

「源信は『往生要集』において、『無量寿経連義述文贊』を引用している。引用箇所は、『無量寿経連義述文贊』の書名ではなく「憬興師云」・「興云」・「憬興師疏」と記されている。親鸞は『教行信証』や『浄土三経往生文類』において、『無量寿経連義述文贊』を引用している。引用箇所は、『無量寿経連義述文贊』の書名ではなく「憬興師云」と記されている。」とある。

- 22) 明母・微母/m/が幫母・非母・滂母・敷母/p/や並母・奉母/b/と音韻論的に対立することも提示し得るはずである。ここではわずらわしさを避けてこの論議を省略した。
- 23) 百濟語では滂・敷母が音素 /pʰ/ではなく変異音 [pʰ]であるから、この検討が必要ない。
- 24) この分布分析表の代わりに韻圖を活用して声母の分布を確認することもで

きる。しかし韻圖だけでは最小対の有無を確認することが非常に難しい。この点でいずれにせよ分布分析表を作成する必要がある。

- 25) 1954年のこの予測は完全にはずれた。それ以降現代音韻論では弁別の特徴理論が猛威を振るったためである。
- 26) 「苴」の韻母を麻韻としても麻韻の韻腹の音価についての論議は変わらない。3等は2等と異なり、介音を持つのが一般的だから、(16)の対立項の有無や種類ですでに音価が異なるからである。
- 27) 漢語上古音の介音に /*j/と /*w/だけでなく /*r/もあったという最近の研究によれば、2等韻はたいてい介音 /*r/を持つ。この新学説によって、1等はこの歌韻に後舌低音母 /*a/を当て、2等の麻韻に /*ra/を当て、歌韻と麻韻の韻腹が同じだったとし得る。即ち歌韻と麻韻の音価の違いは介音 /*r/の有無の違いであって、韻腹の違いではないという解釈は可能である。しかしこの解釈を取った学説がまだ提起されていないので、歌韻と麻韻は韻腹の音価が互いに異なつたと見る。
- 28) この高母音化は後期中古音で実際に起こった。
- 29) 魏國峰(2014: 140~1)では黃笑山(1995)に従って佳韻に韻尾がないものと見ている。他方、이토 지유키伊藤智ゆき(이진호イ・ジンホ訳)(2007:187)では平山久雄(1967)に従って佳韻に韻尾 /-w/があるとしている。
- 30) 이승재李丞宰(2016a)では韻尾 /-ŋ, -k/ を持つ韻母を論議の対象としているが、その間大きな修正があったため、ここでは韻尾 /-n, -t/ を持つ韻母に替える。/-n/は声調が平声、上声、去声である時の韻尾であり、/-t/は入声である時の韻尾である。
- 31) 具体的な用例は이승재李丞宰(2016b)を参照されたい。
- 32) 詳しい論議は이승재李丞宰(2016b)を参照されたい。
- 33) これについては이승재李丞宰(2016b)を参照されたい。
- 34) 百濟語と前期中古漢語の母音体系はまだ分析していない。従って母音体系の相互対比は次の機会に譲る。
- 35) 이승재李丞宰(2013: 123)では全清、次清、全濁、不清不濁の占有比率が各々 42.7%, 7.8%, 23.6%, 25.9%としている。これは音素分析を実施する前の占有率だから、音素を分析した後では各々 46.4%, 4.1%, 26.0%, 23.5%に修正しなければならない。
- 36) 『世説新語』の対話文3回以上使用された漢字に限定すれば、1,112字となる。
- 37) この670字は百濟語と高句麗語の表音字である690字に似た数値になるように合わせたものである。
- 38) 注18)の比喩を参照されたい。

- 39) 高句麗語では/ŋ/が子音体系に入るが、語頭や初声の位置には /ŋ/が来ない。
- 40) 董同龢(1944), 王力(李鍾振, 李鴻鎮譯)(1980: 146), 鄭張尙芳(2003)は云母と匣母の相補分布を重視し, Karlgren(1954/92)と李方桂(1980)は群母と匣母の相補分布を重視している。
- 41) 濁音の清音化が起った時期については初学者の見解が一致しない。王力(1957)によればこの時期は『中原音韻』の14世紀であり, 平山久雄(1993)によれば邵雍(1011~1077年)の『皇極經世聲音唱和圖』が著述された11世紀である。これとは異なり, 周長楫(1994)は閩南方言で『切韻』以前にすでに濁音の清音化が終わっている可能性を提起している。われわれは水谷眞成(1967)の学説を取り, 濁音の清音化が7世紀中葉から始まり, 8世紀末に完成したと見る。姜信沆(2015)では濁音の清音化が7世紀に始まり, 千年近く持続したと見ている。
- 42) これは一般的な傾向であるだけであって例外が少なくない。これについてはイ토 지유키伊藤智ゆき(이진호 Yi Jinho 訳)(2007: 92)の脚注 5)を参照されたい。
- 43) 이승재李丞宰(2013: 257~8)では憬興の反切字と『日本書紀』の百濟語の表記字を百濟語の表音字に入れるかどうかによって /kʰ/を百濟語の音素目録に入れることも抜くこともできるとした。この論文では百濟語の表音字を百濟滅亡以前の資料に限定するので, /kʰ/を音素目録から除いた。
- 44) 李丞宰(1983)では朝鮮半島全体に ‘Δz’があったと仮定し, 西北方言で一番先に ‘Δz’がなくなったものと見た。しかし西北方言には最初から ‘Δz’がなかったかもしれない。

(菅野裕臣訳)

参考文献

- 姜信沆(2003), 『韓漢音韻史研究』, 서울: 대학사.
- 姜信沆(2011a), 韓國漢字音(15・16世紀現實音)과 魏晉南北朝時代音의 比較, 『震檀學報』 112, 서울: 震檀學會.
- 姜信沆(2011b), 南・北系漢語와 韓國漢字音, 『韓國語研究』 8, 서울: 韓國語研究會.
- 姜信沆(2015), 전탁음에 대하여, 『韓國語研究』 12, 서울: 韓國語研究會.
- 郭忠求(1994), 『咸北六鎮方言의 音韻論』, 서울: 國語學會.
- 郭忠求(2015), 육진방언의 어간말 자음과 그 변화, 『방언학』 22, 서울: 한국방언학회.
- 權仁瀚(1997), 한자음의 변화, 『國語史研究』, 서울: 대학사.

- 김무림(2007), 국어 한자음의 체계적 근대성, 『한국어학』 34, 서울: 한국어학회.
- 金英培(1997), 『增補平安方言研究』, 서울: 太學社.
- 朴炳采(1971), 『古代國語研究』, 서울: 高麗大出版部.
- 王力(李鍾振, 李鴻鎮譯)(1980), 『中國言語學史』, 대구: 啓明大學校出版部.
- 魏國峰(2014), 고대 한국어 음운 체계 연구, 서강대 박사학위논문.
- 李基文(1972/77), 『國語音韻史研究』, 서울: 國語學會.
- 李敦柱(2003), 『韓中漢字音研究』, 서울: 태학사.
- 李丞宰(1983), 再構와 方言分化— 語中‘-시-’類단어를 중심으로, 『國語學』 12, 서울: 國語學會.
- 이승재(2013), 『漢字音으로 본 백제어 자음체계』, 서울: 태학사.
- 이승재(2016a), 고대 한자음의 음운대립 연구, 한국언어학회 창립 40주년 기념 특강 원고.
- 이승재(2016b), 『漢字音으로 본 고구려어 음운체계』, 서울: 일조각.
- 이재돈(2007), 『중국어 음운학』, 서울: 學古房.
- 이토 지유키(이진호 역)(2007), 『한국한자음 연구』, 서울: 역락.
- 이토 지유키(이진호 역)(2011), 『한국한자음 연구-자료편』, 서울: 역락.
- 장세경(2007), 『한국고대 인명사전』, 서울: 역락.
- 崔明玉(1985), 존 로스의 Corean Primer 「한국어 초보」와 평북 의주지역어, 『國語學論叢』 (素堂千時權博士華甲紀念), 서울: 형설출판사.
- 칼그렌, 버나드(崔玲愛譯)(1985), 『古代漢語音韻學概要』, 서울: 민음사.
- Karlgren, B. (1954/92), *Compendium of phonetics in Ancient and Archaic Chinese*, Taipei: SMC publishing Inc.
- Karlgren, B. (1957), *Grammata Serica Recensa, The Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities no. 29*, Stockholm.
- Martin, Samuel E. (1953), *The phoneme of Ancient Chinese, Journal of the American Oriental Studies supplement 16*.
- 董同龢(1944), 上古音韻表稿, 臺北: 歷史語言研究所.
- 黃笑山(1995), 『『切韻』和中唐五代音位系統』, 鄭州: 文津出版社.
- 黃笑山(2006), 中古-r-介音消失所引起的連鎖變化, 『丁邦新先生七秩壽慶論文集』.
- 李方桂(1980), 『上古音研究』, 臺北: 商務印書館.
- 鄭張尚芳(2003), 『上古音系』, 上海: 上海教育出版社.
- 周長楫(1994), 濁音和濁音清化芻議, 『音韻論研究』 3, 中國音韻學研究會.
- 周傲生(2008), 『切韻』的音韻格局, 浙江大學博士學位論文.
- 王力(1957), 『漢語史稿』, 北京: 科學出版社.
- 李榮(1956), 『切韻音系』, 北京: 科學出版社.

河野六郎(1968/79), 朝鮮漢字音の研究, 『河野六郎著作集』2, 東京: 平凡社.

水谷眞成(1967), 上中古音の間における音韻史上の諸問題, 『中國文化叢書』1 言語, 東京: 大修館書店.

平山久雄(1967), 中古漢語の音韻, 『中國文化叢書』1 言語, 東京: 大修館書店.

平山久雄(1993), 邵雍『皇極經世聲音唱和圖』の音韻體系, 『東洋文化研究所紀要』120, 東京: 東洋文化研究所.